

21世紀フォーラム

特集 **がらくた箱**

第 **12** 号



野辺のがらくた箱



40年越しの宿題／金森久雄	2
平等論／河合秀和	3
入試に想う／木田宏	4

■特集■

部会メンバー・アンケート回答／がらくた箱	6
古い便り／石井好子	11
私のがらくた箱＝対談＝加藤芳郎／檀ふみ	12
ミルクの匂いのがらくた箱／大山のぶ代	17
がらくたと触覚情報／秋岡芳夫	18
知の放牧場＝がらくた箱＝対談＝川喜田二郎／西江雅之	21
がらくた箱の楽しみ／松山猛	26
カラー・グラビア／野辺のがらくた箱	29
晴々ハウス／佐賀和光	33
現代のがらくた箱、考＝対談＝栄久庵憲司／日下公人	34
2001年文庫『ザ・ライト・スタッフ』	39
用語でみるうごき	40
今年の政治展望 岡村和夫氏に聞く	44
変わるアジアの対日観 斎藤志郎	46
わが国原子力開発の問題と課題 榎本晃章	48
日本エネルギー経済研究所／中国のエネルギー事情	50
政策科学研究所／パニックは起こるか	52
■フォーラムズフォーラム■私の近況／茅誠司・林雄二郎・大来佐武郎	54
部会報告	56
■21世紀コラム■気になること／ロベール・J・バロン	57
目下の大問題／松原秀一	58
新メンバー紹介＝佐々木高明さん／舛田忠雄さん	59
21世紀フォーラム部会メンバー	60

40年越しの宿題

金森久雄

(社)日本経済研究センター理事長／茅誠司部会

このような本を読んだ人と読まなかった人とは、その後の人生に多少の差を生じるかも知れない。

私はこうした青年の必読書をほとんど読まなかった。それは、私が人生とは何ぞやという深刻な問題になやむようなたちでなかったこともあるが、それよりも戦争中で本がないという物理的な原因が大きかった。今のように本が溢れている時代には、想像もできないことである。新本でなくても、古本であれば手にはいるりそんなものなのに、どこへかくれてしまっていたのだろうか。岩波文庫などは、どんなつまらないものでも本屋の店頭にはなかったように思う。改造文庫は少し売れ残っていたが、それも端本。『罪と罰』であれば(三)だけとか、『戦争と平和』なら(五)と(七)だけといった塩梅であった。『罪と罰』を読んでも、すでに老婆殺しはとくに終わった後で、ラスコーリニコフと判事とがわけのわからない問答をしているところがでてきた。『戦争と平和』では、アンドレイ公爵やナターシャは登場せず、気むずかしい老公爵とマリヤの陰うつな場面であった。そこでそれ以来すっきりという本は敬遠することにした。戦後になって、幾らでも買えるようになったが、長い面倒なものは到底

読む元気がおこらなかった。こうして三十余年たった。

だが、人間の精神は不思議なものである。歳をとると、中学校、高等学校のクラス会への出席率が高くなるようなもので、或る年齢に達すると懐旧の心が湧いてくるものであろうか、若い頃に読むべくして読まなかった本を読みたいという気持がおきてきた。筑摩書房・世界文学大系九六巻を手にいれた。古本価格で十万円あまりである。ほとんど読んだことがないものばかりだ。月に一冊読んでも八年間、二月一冊なら十六年間かかる。十数万分の知識も吸収しないうちに、生命の方が消滅しそうだと思うたら少し圧迫感をおぼえた。しかしとにかく私の十歳代以来の宿題であったトルストイ、ドストエフスキーから読みはじめることにした。

読みはじめて、まず感心したのは、その構成が実にガッチリしていることであった。昔、端本をとび読みし、前後の段々らくのはつきりしない瓦礫が一つの大建造物にまとまった。次には人間である。これらの小説にでてくる人間は、唯一人として、或る意味では実在の人間らしくない。私達の周囲に居る人達の方が些細なことに、おこったり、喜こんだり、気

をつかたり、ずっと雑然として把握しがたい。現実の人間というのはそうしたものだと思っていた。しかし、トルストイ、ドストエフスキーは人間に別の真摯で美しい側面があることを描いてみせた。『戦争と平和』は二週間ぐらいかけて読んだ。ロストフ、ボルコンスキー、クラウギン、ベズーホフという四つの家族とすっきり馴染となって、話が進行して別れるのが惜しい程であった。最後には、激しい運命の浮き沈み、さまざまな苦しみした後で、平凡で平和な生活がおとづれ、可憐なナターシャが平凡な主婦、母親となるのに安心もし、がっかりもしたのである。

このようにして、私にいま一番興味があるのは、人間である。本当であれば直接本物にぶつかって人間を知るのが一番いいのであろうか、それは厄介である。ラスコーリニコフのような半精神異常の人間が周辺に居たらやりきれない。ナターシャの如き愛すべき女性が周辺にいれば家庭争議の種になりかねない。書物とおして、安全に人間を知る程度のこと。が今の私には一番ふさわしい。世界文学大系九十六巻中九十巻程はまだのこっている。この中にどのような人間が存在しているのであろうか、楽しみだ。

平等論

河合秀和

学習院大学法学部教授/小松左京部会

二十一世紀に向っての展望を開く時に、「平等」が少くとも一つの重要な価値であると考えて間違いないさそうである。しかし、この平等ほど把えにくい観念も他にあまりない。ここで書いてみたいのは、

平等は一般に思われているほど革新的、急進的、左翼的、社会主義的、第三世界的（その他いろいろな形容詞が浮んでくるが）な観念ではなくて、むしろ保守的な価値でもあるという点である。

規約や習慣が安定していて、見通しが立てやすいというのは、一つの価値である。規則や習慣は、一般に例外なく適用される。例外を設けた時には、特別の理由があることを証明しなければならぬ。ということ、例外なく——つまり平等に規約や習慣に従うことが価値と考えられていることを意味する。

もちろん規約や習慣が不平等を含んでいることはよくある。古来の習慣に不平等の事例が多いことは、いまさら挙げるまでもないであろう。現実の規則についてもそうである。規則が不平等を定めていることもきわめて多い。

しかし（なるべく馬鹿馬鹿しい例を選ぶとして）、男女は不平等であるという習慣、不平等であるべしという規則を考えよう。たしかに男女は、ここでは不平等に扱われているし、扱われねばならない。しかし、すべての男、すべての女は、男女それぞれのグループの中で平等に扱われることになるであろう。例外を設けるならば、言訳けをしなければなら

ない。つまりこのかきりで、男女の不平等の底にもある種の平等がある。

現在いわれている平等は、ここでの男女の区別のようなグループ分けを否定することを前提にしている。つまりすべては人間であり、したがって人権を担うものとして平等であるというのである。しかし、現実には女性が不平等に扱われているとして保護するしよう。女性の重労働を禁ずるとした場合、女性は重労働ができなくなるという意味では、男性と不平等の立場に置かれることになるであろう。女性に産休を与える場合には、お産のできない男性は産休がとれないという意味で、今度は逆の不平等な扱いを受けることになるであろう。

人権における平等というのはやさしい。しかし現実の不平等を克服しようとする手段はすべて新しい不平等を生み出す。すべてはケース・バイ・ケースであるというのも、これまたやさしい。しかし多様なケースを貫く原則——規則といいかえてもよい——がないことになれば、先の見通しが立てにくくなり、暮しにくいことになるであろう。

私は、不平等といわずに差違というべきであったのかもしれない。たしかに差違は不平等の発生源であるが、しかし差

違がすべて不平等を生むということにはならない。家族制度を前提にするかきり、遺伝子における不平等はやむをえないことと考えられる。一方で徹底した平等主義者は、一切の差違をなくそうとして、遺伝子の例でいえばオルダス・ハックスレーの『すばらしい新世界』を夢見ることにもなるであろう。

どうやら、このような徹底した平等論があまり出てこないのは、平等をつきつめればどこかで他の価値——右の例でいえば家族制度といった——と対立することになるからであろう。そうとすれば、平等は他の何らかの価値といわば共存せざるをえないという性質の価値であるということになる。つまり、平等は常に——その他の価値についての——不平等につきまとわれざるをえない。

それでは、さらに先に進んで、平等はそれ自体が価値ではなくて、他の価値を実現するための手段としてのみ価値を有するということになるであろうか。平等が規則や習慣と同じく古くて高い価値であるとすれば、さしあたって安定とか漸進的な変革とかの関連で平等の考え直しを始めねばならない。

入試に想う

木田 宏

国立教育研究所所長／大来佐武郎部会

てみた。合計点以外の要素を加味して、志願者の特徴を多面的に考慮できないかと思っただのである。

ところがその大学のA学部が同じ発想から、総点の低い者でも見所のある志願者を合格させたことがあるが、そうすると、いわゆる偏差値の低い者が入ったということ、受験界に入り易い学部であるかの如き情報が流れる。すると、翌年、従来殆ど受験生の質に差のなかった同大学のB学部と比べて、受験生の流れが変わって来たというのである。

どうも、できる学生は、偏差値の低い大学を受けては活券にかかわるといふことになるらしく、A学部を避ける。それが結局A学部のイメージダウンに連がる。そこで、偏差値の高いところで切るといふ総点主義へ戻すことになってしまったと聞かされた。

何を学ぶかで大学を選ぶのではなく、程度の高いどの大学に入るかということが、入試の目標となるような学生の気風、そしてまた、その有名大学から職員を採用しようとする社会の側の考え方があり限り、入試改善を唱えてみても、どれだけ効果が期待できるかは疑わしい。

しかし、だからと言って、これまで通りの総点主義で合否を判断する入試を続けていては、結局、その弊害を強めこそ

すれ、改めることはできないままになってしまふ。そこで、何とかして、評価の基準を多元的にできないものかというのが、共通一次試験と二次試験の併用という措置であった。

共通一次試験では一般的、平均的出題を行い、二次試験で各学部学科ごとの個性的な出題を行う。入試は偏差値の高いところへ挑戦するというのではなく、自らの為すべきことを考えさせるといふ方向へ、少しでも舵取りしたいと考えるのである。

共通一次試験になって、国公立大学への志願者が減ったという。しかし、共通一次が始まる前から、五教科の出題が行われていた国立を避けて、大都市の私学へという流れは強いものがあつた。

戦後の大学大衆化時代に、戦前からの有名私学が受験生の目標とされ、多数の受験生を集めて、合格者の偏差値を高めたことは、顕著な変化であり、六大学が高嶺の花となりつつあることも、実感である。この流れは、受験生に前記の気風がある限り、急に改まることはあるまい。しかし、それにしても問題は、入試の総点の高い者を選ばないといふのではなく、あることを学び、あることを為さんとする学生をどのようにして育てるかということではないであろうか。

昨年十一月ロンドンで森嶋通夫教授のお宅に遊び、談たたままノーベル賞が何故京都かという話題になったとき、京都を選んだ学生の中に、試験よりは、自らあることを為そうと考えた者がいたといふことではないか、という示唆があり、大変考えさせられた。

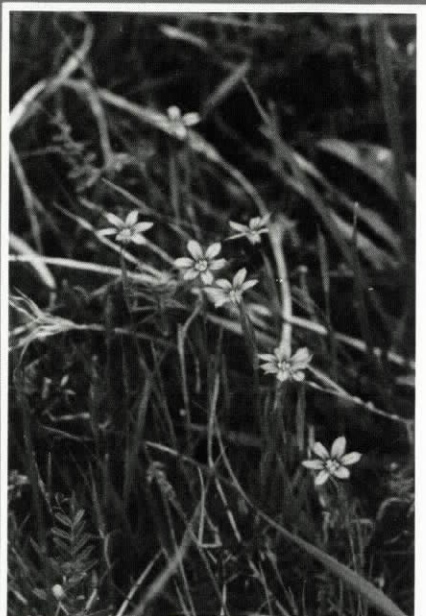
大学は記憶力のいい者に情報を記憶させるところに終ってはなるまい。自らの個性を伸ばし、創意と工夫に挑戦する若者が、果立つて行ける場にならなければなるまい。

その意味において、各大学が二次試験に創意と工夫を加え、共通一次試験の繰り返しを行うのではなく、特色ある人物を見出し、育てよう心掛けてほしいものである。

また学生を受け入れる採用側が、偏差値による大学の格付けにまどわされることなく、特色ある人物を見出す努力を惜しまないよう希望したのである。こうした関係者の長い努力が続くのであれば、とても点数主義にとらわれている学生の気風を改めていくことはできないであろう。独創性の涵養など、期待すべくもないのである。

文部省の大学学術局を担当して、入試改善を考えていたときのことである。ある有名私学の学長に、入試成績の合計点の高いものから順番に合格させるといふ総点順を改めることはできないかと尋ね

特集がらくた箱



■部会メンバー『がらくた箱』アンケート回答



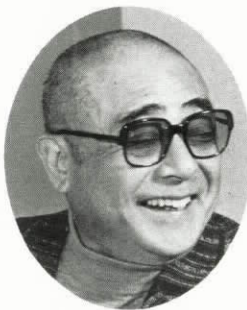
- 1 『がらくた箱』をお持ちですか？
- 2 その中味はどのようなものですか？
- 3 いつ、それをお使いになりますか？
- 4 『がらくた箱』にどんなイメージをお持ちですか？



尾関通允さん

著述業・自由学園講師／茅誠司部会

- 1 お示しになっているような意味においてなら、確かに持っています。
- 2 新聞の切り抜きなど、各種のデータ。
- 3 原稿を書くとき、経済講演をするとき、学校で学生に話をするとき。
- 4 第一印象としては、子供の「宝物入れ」。



田崎 潤さん

俳優／加藤芳郎部会

- 1 ほんのお粗末なものが持っています。
- 2 切り取った絵、特に中国の絵。そして、役者としてのこず。
- 3 ふと思い出したり、勉強するとき。
- 4 自分の宝物や捨てるにはもったいない愛着の有するもの。自分だけに大切なもの。



向坊 隆さん

原子力委員会委員長代理・前東京大学総長／21世紀フォーラム発起人

- 1 持っています。
- 2 新聞や雑誌の切り抜き。
- 3 整理する暇がないので、最近ほ溜まるだけで使いものになりません。
- 4 捨てるのも惜しいし、整理しないと役に立たないし、困ったものと思っています。

今回の特集は「がらくた箱」です。いつの間にか手元に集まってしまったモノとか、断片的な知識・情報といったものを「がらくた箱」として、二十一世紀フォーラムのメンバーの方々にアンケートをさせていただきました。

ご回答をいただきましたのは、つぎの十六名の方々です。(編集部)



宮本千晴さん

近畿日本ツーリスト㈱日本観光文化研究所員／加藤秀俊部会

① 持っています。というより、私のまわりにあるものほとんどががらくた、そしてその容れものです。

② 文具類、写真道具類、登山道具類、本、資料類のすべてで、当面夢中になっているものに関するごく限られたもの以外。がらくたでないものは、その辺に散らかしてある。

③ たまりすぎて整理したり処分したりしなければならぬとき。あるいは夢中になっていたあるものから卒業するとき。

④ 直接には、中学生の頃作った書棚に作りつけた引出し。その中に大事にしていたものをしまったとき、それらのそれまでの魅力が急に薄れたのを覚えている。さらに広くは人間の住居、まさにがらくた箱。文明、まさにがらくた箱。人間はがらくたに固執し、集積し、がらくたから新たながらくたを作りつづけること



松原秀一さん

慶応義塾大学文学部教授／国際交流研究部会

① 机の抽出しも書斎もガラクタ箱のようなものです。私の頭の中もそうかもしれません。戦争中に育って「廃物利用」と云う言葉を知った世代で、捨てることを十分に学ばなかった悲しさでしょう。

② 正に雑多なものです。何年も見えないスライド写真、セルフ・タイマーのこわれたもの、イタリヤで拾ったモザイクのかけら、古い手帖、ロンドンで使った鉛筆等、二寸、箱をのぞいたら目につきました。

③ 使うのはメモをかけた雑多な紙片とカードの入った抽出しです。しかし、たしかに書いてあったと想うものは出て来ず、ついでに見つけたカードに新しい思い付きを得たりして、さまよい出すことが多く、効率的ではありませんし。

④ オモチャの入った丈夫な木箱。



村田 浩さん

日本原子力研究所顧問／茅誠司部会

① 小さながらくた箱に類する容れものが沢山あります。

② たとえば海外旅行をしたときなどに手に入れたレストランのカードとかマッチ類、あるいはまた音楽会や展覧会などの入場券とかプログラム、さらに出先のホテルや街角で買ったものの便りに使わず、そのまま残ってしまった絵葉書などなど。

③ たまたま同じ方面に出かけることがあるようなときに、思い出して引っ張り出して見ることがあります。

④ 子供達が遊び古した玩具や積木や絵本などを入れておく箱のようなもの、あるいはいちいち整理もせず、といって放り出すにもしのびないといった品物などを、とりあえず突っ込んでおく場所とか容れもの。

川喜田二郎さん

筑波大学教授／松本重治・加藤秀俊部会

① 持っています。

② 小生考案の「KJ手帳」と称する、KJ法用のラベルでできた手帳です。毎日のメモとし、大学ノートに略式（KJ法ではありません）に構造化し、貼りつけておきます。心おぼえも、内きも、何でもメモ。

③ 大学ノートに貼りつける時、既にヒラメキがよくできます。次にそれを見直した時、ヒラメキを追加記入。更に、気にかかったテーマにつき、そのノートから取材し、KJ法で本格まとめ。――↓全体把握と、大きなヒラメキ。

④ ふつうの人は、「いさぎよく捨てられない。しかし、無用なもの」のイメージでしょう。しかし小生の場合は、宝の倉。



中村 貢さん

朝日イブニングニュース社長／茅誠司

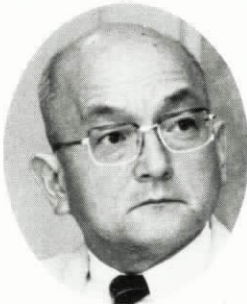
・大来佐武郎部会

① あります。

② 新聞の切り抜き。ブック用のスクラップや封筒に仕分けするクリッピング方式ではなく、内外の新聞から手当たり次第に切り抜いて放り込んでおく。

③ 一カ月に一度、中味（切り抜きのヤマ）を再点検し、分類しながら捨てるものは捨てる。残ったものを半年に一度、また再点検し、残すものだけを残り、長期に保存する。長期保存に耐える新聞記事がいくかに少ないかをそのさい思い知らされ、反省する。

④ 私の場合はそれ以外の「がらくた箱」を持っていない。



吉川 光さん

NHK整理部担当部長／国際交流研究部会

① 自分の家全体が「がらくた箱」のような気がします。

② 特派員時代、モスクワの古道具屋で買ったサモワールや、偽物と知って買って買った絵など、二〇点ほどあります。居間にゴチャゴチャと掛けたり、並べたりしております。

③ 家族でモスクワ在勤時代の思い出話をしたり、ロシア料理を家で作ったりした時など。

④ あまり役には立たないけれど、一つ一つに思い出があり、愛着があつて捨てることのできないもの。





千 宗室さん

裏千家家元／国際交流研究部会

- ① 持っております。
- ② がらくた箱というより、眺めてあきないもの、しかも使えるものを沢山持っていますので、私にとっては用い箱とでもしたいのです。
- ③ 一寸暇が出来た時に取り出して眺め憩いとなるもので、西洋陶器とか、グイ呑みとか、それぞれの品物に応じて使います。
- ④ 前にも述べましたように「がらくた箱」というより、時によつての「用い箱」、即ち、おたのしみ用という方がよろしい。



渡辺文雄さん

俳優／加藤芳郎部会

- ① 私自身が「がらくた箱」のようなものです。私の部屋も「がらくた箱」そのものです。
- ② 雑学、雑知識、雑情報、そして雑物。
- ③ 常時「がらくた箱」の中に手をつっこんで、気に入ったもの、役にたつもの、間にあうものをひっぱりだして使っています。
- ④ 大都会、文明国、地球。



天地総子さん

歌手・タレント／加藤芳郎部会

- ① 持っています（ヨーロッパ家具）。
- ② 中味に応じた箱ではなく、箱に応じた中味を入れております。
- ③ ふだん利用しないが、しかしなんとなくっておきたいガラクタ物を入れておくのに使っています。
- ④ あってもなくてもよいけれど、捨てられない思い出や愛着を感じる家具の一つである。



村上兵衛さん

財日本文化研究所専務理事／松本重治・国際交流研究部会

- ① 持っています。それは私のアタマです。
- ② 興味を懐いたこと、見たこと、読んだことが雑然と詰っています。
- ③ 相手により、箱の中の一つ、または二つを取り出して、相手の反応を試します。
- ④ 質問1で答えました。



佐々木信也さん

スポーツキャスター／国際交流研究部会

- ① 持っていません。
- ② —
- ③ —
- ④ いらぬものはとっておかずにご捨てる主義なので、イメージが浮かばないんです。



中村 元さん

東方学院院長・東方大学名誉教授／松本重治部会

- ① 持っていません。しかし、「がらくた」を生かしたいとは願っています。
- ② —
- ③ —
- ④ —

大来佐武郎さん

内外政策研究会会長・社日本経済研究センター理事・顧問／大来佐武郎部会

- ① ありません。



がらくた箱はいくつか持っている。

やぶり捨てるのが惜しくてしまい込んでいる手紙が多い。手紙だけでなく、雑誌の中から心に残った文章を切りぬいたものとか、こんなのを作ってみようかと切りぬいたドレスの型、料理メモなどもある。未練らしい性質なので整理がつかず、いつも、いらぬ物にかこまれて暮している感じがする。

しかしこの原稿を書く事になってあらためて大切な古い手紙をとり出してみたら、なつかしいお便りが沢山出て来た。

「松風や巴里の便り満ちし本」 徳川夢声さんからの葉書があった。

一番初めに書いた随筆『女ひとりの巴里ぐらし』をお送りしてあとに来たものである。二十数年前の葉書は色も渋茶色に変わっていた。

パリでうけとった淡谷のり子さんからの手紙は、その美しい文字と共に私の心を温めてくれた。

「考えてみれば貴女という方は、はしゃいだりしている時は憎たらしい子だと思うけど、又、しょんぼりしていると、何だかむしろたくなるような、かえって、いい人です」

とあった。思い出してみれば淡谷さんはその頃、私をこづいたり可愛がったりしていた。パリでデビューしたとき、思いがけず藤田

嗣治画伯がバラの花を送って下さった。どこかの馬の骨が分からない日本の歌手に、フヂタが花をとどけてきたというので、店のあつかが違ったように思った。藤田御夫妻にはとてもよくしていただいた。先生は小まめな方で時々葉書を下さった。

この方も亡くなったが馬術の名手遊佐幸平氏である。ヘルシンキのオリンピックのとき、長くパリに滞在された。豪快な方で、その話術の面白さは天下一品であった。どこかパリの街角でお会いしたあとの手紙らしい。

もいくつもある。亡くなった野上彰さんは、私がパリへ発つときこの詩を渡して下さった。——この世には ふしぎな国がある(中略) その国では 靴みがきの少年が大臣よりも大切にされる

古い便り

石井好子

歌手／国際交流研究部会

しました。好物のヨーカンの箱は、永く私の大切な宝になります」

日本から送ったヨーカンのお礼状である。

その箱は先生の亡くなったあとも残っているのだろうか。遠くで亡くなられたから、亡くなられた実感が今でもなくて、すてきな田舎のアトリエで絵をかかれていた姿が今もあざやかに目に浮かぶ。

ここにもう一つ、愉快なお手紙。

何故なら 誰よりも沢山すばらしい歌をハモニカで吹けるから
その国では 郵便配達のおじさんがお金持よりもちやほやされる
何故なら だれよりも沢山おもしろいお話しを知っているから
好子よ
あなたはその国をよく知っている
何故なら あなたはその国のたとえようもないおだやかなそよ風の森に住んで
思のつきせぬよろこびを歌いつづけている
ナイチンゲールなのだから——
外国で歌っている頃、淋しい、辛い日、もあったが、私はその時にこの詩を読んだ。悲しむ事はない、私はふしぎな国のナイチンゲールなのだ、と思うと、心の中が優しさを満たされる思いになった。

は君の胸の痛くなる迄、君をいだいて思う存分embrasserしなかったかと残念でたまらなかつたですよ。笑うなよ君。アムールプラトニックと云うものの結果で、お色ケも理屈もないのさ。呵々」

サインは「爺さん」とある。八十歳近かったと思うが大いに飲み、飲むと、「女さがしてこい」と云って私を困らせた。

何かの時にふと書いて手渡して下さった詩

私の がらくた箱

対談がらくた箱特集

加藤芳郎

漫画家・漫画家協会理事長／加藤芳郎部会

檀 ふみ

俳優／加藤芳郎部会

記憶の中の「がらくた箱」を楽しむ

加藤 「がらくた箱」と聞いたとき、僕はすぐ、ふみちゃんを思い出したんですよ。新聞でチョッと読んだんですが、この人はモノを捨てないんだ。何でもとってあるんだっていうの。

檀 教科書は小さい時からずーっと……。

使い古しのノートも小さくチビた鉛筆も取っとくほうなんですよ。教科書はずっと、何処かにまぎれちゃっていたんです。捨ててないからあるとは思っていませんが……。それが先日、家を建て替えた時のゴタゴタで見付かったんですよ。前の家は雨漏りがひどくて、半分濡れちゃったのが乾いてバサバサになってたの。ああ、もったいないと思って、奇麗にして読み返したんですけどとっても面

白かった。音楽の教科書なんか、あそこに「てる坊主」があって、こちらに「雨降りお月さん」があった気がするなと思っていたのが、その通りにあるんですね。すごうれしくなっちゃった。——でも先生は、いっぱい持ってたっしょるんでしょ。そういうのを。

加藤 戦災が無ければねー。結局あれで昭和二十年以前の子供時代のがらくたは、僕が戦争に行ってる時にみんな燃えちゃったわけ。がらくたじゃない物もちろんありましたけど……。僕は漫画少年だったんですよ。都の防衛局って所に勤めてたんですが、中学生や早稲田の学生を動員して蒲田の一带を建物疎開した仕事なんかを漫画で記録した。当時は凝ってましたからね。クレヨンや水彩や使っ

て面白く書いて、それに文章を入れた。あんなの今残ってれば戦争のいい記録になったでしょうな。——ま、それはそれとして、ベーゴマなんか沢山持ってたんですよ。

檀 子供の時のおもちゃって懐しいんですよ。ダルマ落しなんか今でも時々見かけるけど、昔のもののほうがもって色がどぎつくて、印象が強かった気がする。

加藤 だから、今持っていないかわりに、昭和初期の下町の遊びとかいった本が出ると、ぼくはすぐ買っちゃうんだ。郷愁というか、そう、頭の中の「がらくた箱」というやつがあるんだよね。この間もある所で、僕と同年で品川生まれの学校の校長先生やってると一緒に意気投合して呑みにいったんだけど、ふと「小学校の時のこの歌知ってるかい」と歌ってしまった歌がある。その歌は

ね。僕が生まれ育った渋谷は、子供の頃に郡から東京市に編入されたんだけど、その時の喜びを歌ったものなんだ。いい歌なんで、風呂に入ったりして思い出すんだが、東京にこれだけ人間がいても、あの時代にあの地域に住んでいた人しか知らない。兄弟で集まったり、同窓会でたまに歌うだけ。その歌をその人も歌えるんだねえ。感激したよ。でも校長先生のくせに歌詞間違えた。おれのほうが覚えていたよ(笑)。

檀 そういうのって、ものみたいに取っけないからなあ。人の記憶の中にあるものだから貴重ですよ。

加藤 トンボ取りの話も出た。「東京っ子ならノーツ知ってるでしょう」といったら知ってるって。夏休みの終りごろ夕方になると銀ヤンマのつるんだのが来るでしょう。あれを

銀ノーツって言うんだ。男の子にとって最高の獲物なんだな。夕日の射す一望の原っぱに近所の子供仲間と出て行ってそれを追うんです。広い場所ですからそれぞれの地域から子供達が出て来て、いくつかのグループが散在している。それがね。こっちの集団が取り逃した獲物が他の集団のほうへ飛んで行くと「ノーツ」と大声を掛けるんですね。「獲物が行ったぞー」って知らせてやるわけ、お互いに。自分たちが失敗すると、次の連中に幸せを送るんです。今の子供たちにこういうこと出来るかなあ。

檀 記憶の中の「がらくた箱」……。でも最近はその捨てて美学みたいのがあるんで

捨てるって胸がドキドキしちゃう

加藤 どちらかというと、やはり僕もバツバツとは捨てられないほうですね。ただ、僕はね。収集マニアの気は無いんですよ。というのは、もし僕が収集を始めたら、收拾がつかなくなっちゃうんじゃないかと思ってね(笑い)。

檀 何も集めてらっしゃらないの？

加藤 集めてないですね。

檀 でも、自然と集まってくるというか、残っちゃって、これ捨てるのもったいないなというの……。

すよね。捨てなくっちゃいけないっていう。家なんかでも綺麗になりすぎているのね。いろんな家の雑誌なんか見ると、台所なんかドイツ製のシステムキッチンを置いてとても綺麗。あたし、ドイツに行って驚いたんですけど、ドイツ人てあまり焼いたり揚げたりしないんですね。だから台所はいつも綺麗なかで、あれは見るためのものらしい(笑い)。そういうの日本に持ち込んだら、みんなお料理しなくなっちゃうんじゃないかな。それが隣のフランスでは台所で子供にオシッコなにかさせてる(笑い)。ところで先生は、モノをお捨てになるほうですか？

加藤 えーとね。ゴルフのスコアカードは随分前から取ってある。とくに最近意識して全部取ってありますよ。時々見ちゃ反省材料にするんです(笑い)。そしたら去年の分はちょうど六十枚ありましたね。それを言ったら、皆が尊敬のまなざしを送った。「偉い！」と言ってね(笑い)。相撲の番付も、だいぶ厚ぼったく持っているな。大鵬、柏戸の番付なんて面白いよね。たまに、そういうこともあるんだけど、時々バツと気が変わって「燃やしちゃう」なんてことになるんだよね(笑

い)。それが間違いなんだな。

檀 もったいないですね。あたしは全部捨てられないほうなんです。だからほんとに収拾がつかなくてどうしようかと思って……。

昔の遊び道具やお人形、特に人から頂いたものは捨てられないですね。幼稚園のときのお道具箱まで持っているんです。最近やっとチビた鉛筆なんかは捨てるようになったんだけど、でも、捨てるってね。ものすごく胸がドキドキするのね(笑い)。

加藤 それは方法もあるんだよね。なにか一つに決めちゃうわけ。この中であたし、チビた鉛筆を記念にとつこうとかして、綺麗な箱に、一年生の時からのチビた鉛筆をずつと並べていく……。そうしないと永遠に溜まるばかりだからね。僕もいつかそうやろうと思ってるんだけれど。

檀 何でもゴチャゴチャあると駄目なんだな。

加藤 うん。でも自然にそうなるだけ(笑い)。なんだよ。いつか整理しようと思うだけ(笑い)。

檀 でも、何でもゴチャゴチャある中から、思いもかけなかったものを発見した時は楽しいですね。たとえば昔のモノサシなんか、自分で墨と筆使って名前が書いてあったりして、わア、あたしって意外に字が巧かったんだなあ、とか感動したりね(笑い)。母な

んか、わたしに輪をかけて捨てないんですよ。二十五年ぐらい前のNHK料理教室なんか書いたメモまでもある。そこに漫画とか、女の子が涙を流している絵なんか落書きしてあってね。あ、これは誰が書いたんだろうとか、すごく面白いんですね。

加藤 僕なんかもあるね。このあいだ机の引き出しの奥から、昔、友人と旅行したときの写真が出てきた。渡し忘れていたものなんだな。横山泰三なんか写っていて、とっても若いんだよ。いまさらやるわけにもいかねえから置いてあるけど。また、ピラピラの変な紙が出てきてね。何か鉛筆でメモしてあるんだ。これがね。今年十七歳になる息子が生まれた時の名前付けたメモなんだよ。男の子





だったら頼むと、柴田鍊三郎さんをお願いしてあったんだけど、生まれたと聞いて電話を掛けてきたわけ。その電話の応対メモなんですよ。いつか息子に見せてね。「おい、これはお前の名前つけるために柴鍊さんから掛かってきた電話のメモだぞ」なんて言えるわけよ。もっと奥の桐の箱には、終戦後の古い手紙のたぐいが入っている。ペラペラの葉書にね。「原稿料の件、もう少しお待ち下さい。もう少しご勘弁願えませんか。必ずお払いいたします。吉行淳之介」なんて(笑い)。昭和二十三、四年の葉書。まだ、ふみちゃんは生まれてない。いま彼は芸術院会員になっている。

檀 そういふのってありますね。うちも整理すると手紙類が多いんですよ。父が結婚する前に女の人から来た手紙なんか出てくるんです。九十五まで生きた祖父がものすごく

失った淋しさが集めさせないんだ

加藤 しかし、ふみちゃんところは、そうやって伝統的なやつが残っている。僕の子供時分を思い出すとね。床の間に黒檀の火鉢が置いてあった。取っ手が獅子の顔になっててね。両親は大切にしておいた。なぜ大事にしていたのか判らなかつたけど、結局使わずに空襲で燃やしちゃったんですよ。やっ

几帳面で、行季の中に、父の子供の時の絵とか成績表、手紙などを全部とってあったんです。「お金送って下さい……」なんていう父の手紙も。いろいろ言い訳がましく、お金の必要な理由をつらねてあったりして(笑い)。後年の父はそれをすごく取り戻したがっていたんですよ。祖父が死んだら取り戻せると言っていたんだけど、自分のほうが先に死んだので、とうとう取り戻せなかつた。その祖父の明治時代のフロックコートなんか、母が大切に取って置いたんだけど、私が変に合理的になっていた時代があつて、虫食いさせるよりにわつて、テレビドラマの衣裳としてNHKにあげてしまったんです。いま考えると、なんかおじいちゃんに申し訳ないことしたなつて感じたりする……。

ぱり戦争で焼けない限りは、みんな何処の家でも持っていましたな。

檀 そういうふうと言うと戦争というのは……、本当に残念ですね。

加藤 昔の文化を全部焼いちゃった。でも、あれ、焼き払わなかつたらね。また新しくできない。

檀 それはそうかも知れせんね。

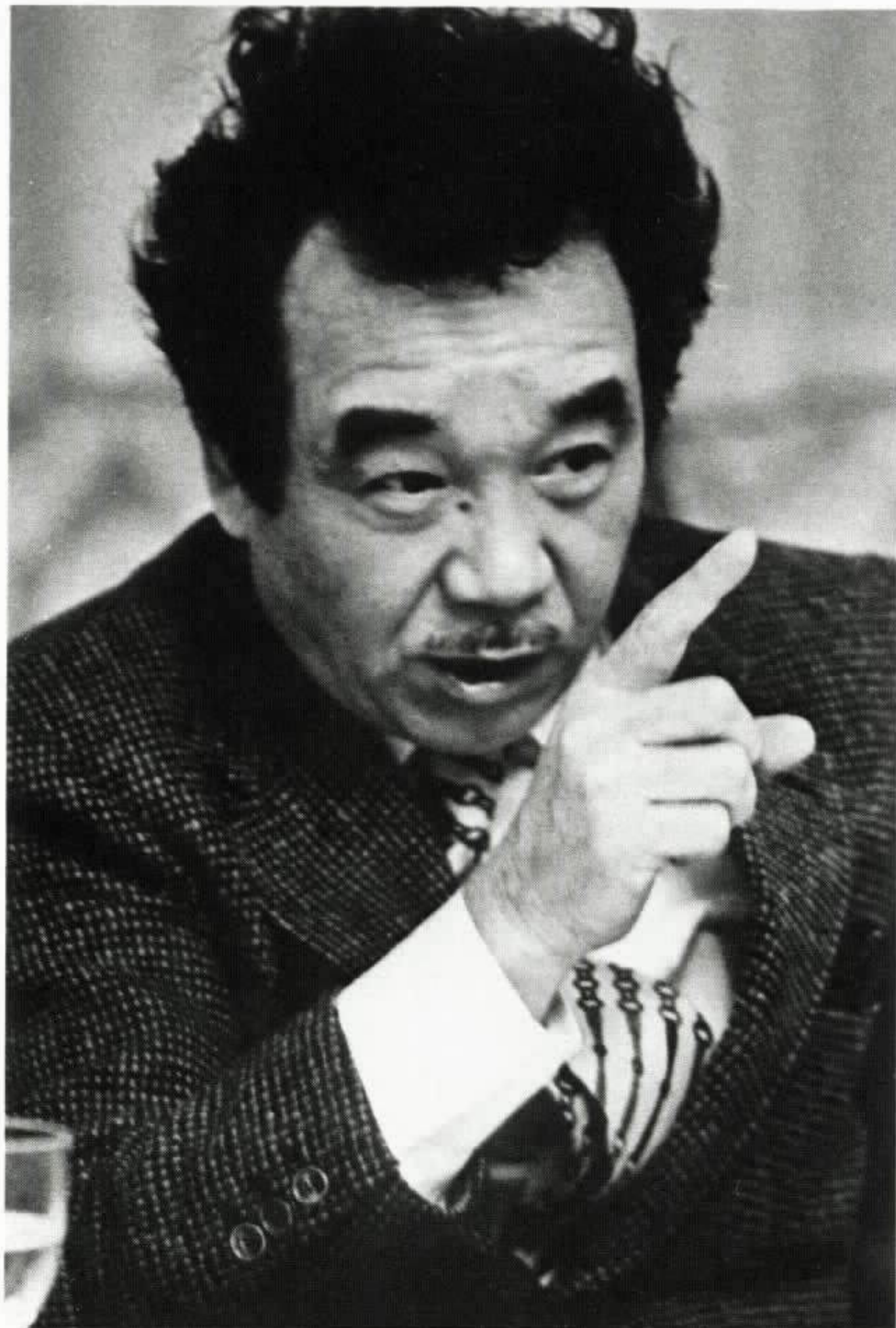
加藤 焼き払われたとき、もう少し都市計画をうまくやれば、東京ももっと奇麗になつたんだろうけど、あそこでモタモタしたからまた同じ。僕の生まれ故郷の渋谷の幡ヶ谷に行くとな。前と同じにゴミゴミした家があつたと建つてる。この次に何かあつても、また同じことやるぞつて思っちゃう。

檀 でも、がらくた”というのは何かしら。やっぱりその本人にしか意味がないというのが、がらくた”なのかしらね。

加藤 そう。子供のころ、長火鉢の引出しがお袋のがらくた入れになっていたんだけど、許可なく開けたら「そこはいけません！」なんておこられたよ。たまには色っぽい写真なんか出して見せてくれたりするんだけど、別段ひどい秘密があるわけでもないんだ。ただ、自分一人が全部理解しているものを「これ、なあに？」なんて言われると、忙しい時には説明出来ないでしょう。それぞれに深い歴史のあるものがいっぱい詰まっているんですからね。

檀 小さいころはまた、なんか大人の持っているものというのは、全部素晴らしいようなものに見えるんですね。

加藤 僕だって子供が部屋に入って来て、僕のがらくた”触つて「これ、なあに？」



なって言ったら、「このヤロー、ダメだ」なんて言っちゃいますよね。本人には神聖なものなんだ。

檀 あたし困っちゃうんですよね。幼稚園のお道具箱なんか汚くて奇麗な引出しに合わないんです。でも、無くなったら何処に行っただろうと悲しい思いになっちゃうから、やっぱり使っちゃう。小学校の教科書がまぎれちゃった時も悲しかったんですが、出てきて、とても嬉しかったんです。そこに思い出がパーツと付いているんですね。昔の匂いのようなものが付いている。

加藤 やっぱり、ふみちゃんの取っつき症

は本物だな。僕もそうなんだけど、一ぺん取って置いたのが焼かれちゃった思いがあるからね。あの戦争が無くて、子供時分のベーパーも一緒になら、ずーっとあるんなら、これも一緒に取っところとなるんだけどね。どうせ取っついたらしょうがねえやと言う、悲しい性があるんだよ。

檀 でも、あたしの母ぐらいの世代の人は確かに取っつきますね。あたしですら、母を見ると「もっと捨てなさい」って言うんです。でも偉いのは、それが何処にあるか、パツと思いつくところですよ。いざ、あれが必要だという時に、何処からともなく出

してきて役に立ちちゃう。
加藤 僕も小包なんかでビニールの紐だと切って捨てますが、麻紐はまた使おうなんて取っつきます。デパートの包み紙も破り捨てないで置いてく。原稿なんかを丸めて、それ

「ゴミ」が何処かで恥をかいている

檀 素敵ですね。もう一回生きた」というのね。バラが付いている包み紙は高島屋のですよ。小さいころあたしはロマンチックだったから、そのバラが素敵でしょうがないわけ。うちは大体、西武デパートだったから、あれは幾何学模様の包み紙でしょう。たまに高島屋の包みをいただく嬉しくてね。そのバラをそーっと切り抜くんですよ。そしてお友達に手紙出すときにシール代りにして張って送るんです。そういう楽しみとか……。小さいころはビー玉でも、安っぽい十円の指輪でも、もう本当に宝物だった。

檀 素敵ですね。もう一回生きた」というのね。バラが付いている包み紙は高島屋のですよ。小さいころあたしはロマンチックだったから、そのバラが素敵でしょうがないわけ。うちは大体、西武デパートだったから、あれは幾何学模様の包み紙でしょう。たまに高島屋の包みをいただく嬉しくてね。そのバラをそーっと切り抜くんですよ。そしてお友達に手紙出すときにシール代りにして張って送るんです。そういう楽しみとか……。小さいころはビー玉でも、安っぽい十円の指輪でも、もう本当に宝物だった。

加藤 うちの娘が小学校のところにね。たま

にふた親で留守の子供部屋に行くわけ。何が入っているのかなって机の引出し開けたりすると、汚ない石ころや瓦のかけらなんかが入っている。汚ねえの入ってるねえ。でも、これ、きつと大事なんだよ。「そうよ、そうよ」と言っ、あと大事に閉めとくけどね。あれ、親によっちゃさ、「何ちゃん、なあにあそこに

で包むんだから。気持ちいですよ。ああ、お前たち、もう一回生きたなって。今のイラストレーターなんかは立派な厚紙の封筒なんか使うけど、こちらは中身で勝負だ(笑)。

檀 そうそう。いまは本当に、とにかく奇麗にしようというのが先にきてるから……。

加藤 ところが、子供にとっちゃ何かあるのよね。どこかの小川へ行ったらキラキラ青く光っていた石だったんだけど、持って帰ったら変な色になってしまった。でも、キラキラ青く光っていたその思い出が、汚ない石に残っているんだ。それを捨てなさいと言うのはよくないと僕は思うんです。いまの若いお母さんなんかは、そこんとこ判ってないんじゃないかねえ。

檀 インテリアだとか何とか言っ、子供の部屋でもピカピカにしちゃって、古い汚ないものは全部捨てちゃうんですよ。日本の経済全体がそうになっているみたい。でも、モノって限りがあるんだから、役立つものは役立たせたいという気がしますね。でも、あたしの場合ちょっと行き過ぎで、本当に捨て

られない悩みなんですよね。

加藤 戦災体験で恨み骨髄というわけからでも無いんだけど、僕はモノを灰にするのも好きなんですよ。

榎 焼くのが……。

加藤 ええ焼くのが。僕の家は今ほりが建て込んできたけど、最初は畠の真ん中だったんですよ。建てた時、大谷石で大きなパーベキュー畑を作ったんだ。パーベキューは一度もした事ないけど、燃やせるゴミは全部そこで燃やしてしまう。多少の煙りは出るけども、そこは先住民だからってね。うちから出したゴミが、どこかでゴミとして恥かいてるのが嫌なんだな。

榎 生き恥さらしているみたい……、せっかくだから綺麗な紙なんか、生ゴミと一緒にやってクサクサ、腐ったりするのがね。

加藤 しかも、加藤芳郎様なんて宛名の入った封筒なんかもあるんですよ。だから灰にしちゃうんです。その灰を、よかったな、お前たちって小さな袋に入れてゴミとして出すんです。

榎 ほんと、夢の島行くとゴミが可哀そうですね。多分いろいろの思い出があるハンドバッグとか、まだ使えそうな品物が生ゴミと一緒にあって、すごい臭いのところに置かれているのは可哀そうだと思いますよね。

加藤 ただ、黒い煙の出るゴミはあまり燃やせない。気に入って、ずいぶん古したシャツなんかあるですよ。ボタンも取れちゃって捨てようかなと思うけど、これが夢の島に行くの嫌なんだな。でも燃やすと黒い煙が出る

輝く^レがらくた^レを見きわめる

榎 あたしも。トイレに行くとき雨漏りがした(笑い)、メチャメチャに古い家だったんですけど、建て直してお別れする時には寂しかったですよ。要するにもモノじゃないんですよ。ドアのノブにしても、長く付き合っていると生き物みたいな感じがするんだな。

加藤 タイルの一枚ぐらい、お風呂の代表、台所の代表とかいうふうに取りっおいて供養してやらなきゃな。

榎 そう、家の場合は、きれいな欄間があったんで新しい家にそれを使いました。それで、ちょっとだけ心が痛まずに済んだけど、まだ前の家の夢をよくみるんですよ。いまの設計する人は、絶対に古いもの使いたがらないんです。それにね、新しい家に入ると、古い道具がどうしても合わない感じなんです。合わないけど捨てられない。うちは父が料理好きだったので、業務用の洋服ダンスみたい

るして、随分悩んだりするんです。でも結局は燃やしたほうが気持ちいいですね。今度、ふみちゃんとこみに家を建て替えるんですけど、お風呂に入ったりすると、このタイルも何処かに行っちゃうのかねえとかね。

て皆から嫌われてた。「これはお払い箱だね」って食事しながら話していたら、急にその冷蔵庫が「グーッ」って変な音立てたんですよ。

「あ、冷蔵庫が泣いてる」とか言ってる。でもどうしようもないから、きれいに拭いてあげて皆で冷蔵庫と一緒に写真撮ったりしたんですよ。

加藤 ああ、そうか。俺も同じ気持ちになったよ。

榎 いっぱい写真撮ってあげるといいですよ。

加藤 そうだな。僕は家を建て替えるとなつた時、憂うつなほうが多かったですね。庭に出るとね、一木一草に思い出があるんですよ。これを全部取り払わなければならないの。これを全部取り払わなければならなかった。ところが植木屋さんが来て「先生それ判ります。全部お預りします」って、雑草と変わらないようなもので預かってくれた。直径二十五センチほどの藤があったんだけど、これはどうしても新しい庭には入ら

ない。何かに利用してくれといったら、東急の何とかホテルに植えましたって。だから、毎年そこへ行けば、うちの藤が見れるわけ。

榎 いい植木屋さんでよかったですね。

加藤 今日、ふみちゃんと会ってね。ふみちゃんが、本当に昔のおばあさんと同じような気持ちだから、俺は嬉しくなっちゃったんだな。いまの世の中見ると、あまりに捨てざるんじやないかしら。

榎 そう、^レがらくた^レといっても、いろいろの思い出がしみついてる。輝く^レがらくた^レもあると思うんです。あつしはまた見極められないけど、そうした価値ある^レがらくた^レをがらくたなりに取っておいたら、素晴らしいと思うんですけどね。

加藤 昨秋、金沢のほうで、小さなお屋敷料理屋へ連れてかれたんですよ。まあひなびた感じのどうってことはない場所なんだけれども、洗面所に行ったらね、ジャムの空ビンだかにアカマンマが差してある。アカマンマってこんないいものかって、しみじみ見たんだよ。こうした素材さの中に何とも言えない心と文化があるんじゃないかと僕は思いますよ。がらくたを愛するというのは、やはり心じゃないですかね。と、いい結論の出たところで(笑い)。

箱タラクの匂いのミルク

代ぶの大

俳優 / 加藤芳郎部会

ヘイッセ(伊勢)にいがた三河で信州、神戸、武蔵、名古屋、函館、九州、東京……。

子供の頃のマリつきの数え唄です。一から十までの音の入った、この数え方を教わったのは何歳位の時だったでしょうか。マリツキの時はこの数え方で、おはじき遊びの時は、へいちじく、にんじん、さんしょでしいたけ、ごぼうで、ぬかかごで切れたッ……と数えてました。

子供心に、お部屋で遊ぶおそびと、外で遊ぶおそびでは、数え方が違って、マリツキは土地の名前で、おはじきは食べ物の名前ばかりなんだナーと思っていました。

こんなつまらない事でも、私の心の中のガラクタ箱には、いつも入っています。そして時々、ふっとのぞいてみて、一つずつ取り出して楽しんでいきます。

実際のガラクラ箱となると、家中いたる所にあります。大そうじの度に何とか整理しなくては……と思っても、一つずつそれぞれに思いつきが出て捨てるに捨てられず、どんどんたまるばかりです。

始めて沖繩へ行った時ひろった貝がら。ヨーロッパへ行った時の電車の切っぴ。おじいちゃんがいつも持っていた懐中時計、こわれ

ているけど手にとってみると、おじいちゃん
のキザミタバコのおい、がしてくるみたいで、
年に何度か取り出して見えています。大好きだ
った洋服のボタン、片っぽしか残っていない
イヤリング、何かに使えるかも……と思つてつ
いとおく悪いくせ。だから気がつくとき家
中がガラクタ箱になっています。

どれもこれも私の四十何年か生きて来た間
の、それぞれの時に、かかわり合ってくれた
品々だと思ひ、これから先もどんどんガラク
タは捨てないでとっておこう……と思つていま
す。

ガラクタ箱って、いつも目につく所にデー
ンと置いてあるものではありません。心の中
のガラクタ箱も、心いっぱいにもあるも
のじゃないけど、けつして捨てたり、無くし
たりしないで、年々、その箱にしまいこむ事
はふえて行くでしょうけど、その箱を持って
いる事が、それを時々のおきこんで、さまざ
まの思い出にひたる事が、又、わざわざのぞ
きこまなくても、そんなガラクタ箱を持つて
るんだ——、と思う事が、毎日を楽しく過ご

させてくれるんじゃないか……と思つてます。

旅先で、たった一度しか会わなかったけど、
私の心のガラクタ箱にしつかり入ってしまった
た漁師のおじいさん。ウィーンの郊外の宿屋
で、自分の口の中から取り出したアメ玉を私
の口へ押し込んでくれた青い目の坊や。あの
ミルクの匂いのしたアメ玉は、私のガラクタ
箱の中でも、度々のぞきこんで楽しんでいる
思い出です。

ガラクタ箱の良さは、整理整頓しないで、
ゴチャゴチャに入っている事。だから、字引
きをひくみたいに順序だてて思い出すもので
はなく、何かの加減でヒョイと表に浮かんで
出て、又、スーッと奥の方へ入っていく。で
も決して、その箱から外へ飛び出したりしな
いって事じゃないでしょうか。

生きていくかぎり、私は、心の中のガラク
タ箱を、大事に大事にしようと思つていま
す。そしてそれが、いつもいっぱいになっている
ように、毎日毎日、その都度つどあった出来
事、出会った人を、大事にしてゆきたいと思
っています。

私にとって、それがとっても楽しい生き方
であるように思えるからです。

がらくたと 触覚情報

秋岡芳夫

工業デザイナー



これから先も、人間、がらくたと同居して暮らすに違いない。同居すれば住いさながらがらくた箱のようになろう。がらくたときめてかかれ捨てるのだが、がらくたとも定めかねたものと、狭い思いに耐えて同居しつづけるだろう。大学の研究室の書棚や資料棚もソフトのがらくた箱。無価値無用と定めかねた資料が山積。学者もまたがらくたといまも同居しているし、これからもし続けるだろう。

がらくたとは？それが判然とすればがらくたはがらくたでなくなる。がらくたはいささか雑木に似る。辞書によれば、雑木とは、材木としては役に立たないような、粗末な木、薪にする種々の木とある。種々で粗末な点、がらくたはすこぶる雑木的だが、雑木と違い薪にするにはしのびない感じのあるのががらくた。同じく辞書によればがらくたとは、ね

うちの雑多な道具だそうだが、雑多ではあるが辞書の編者が値打がないと一方的に決めてかかっているものでなくて、値打があるかないかはがらくたの所持者のみの、極めて個人的な判断によるべきもの。強いていえば所持者も値打があるのか無いのか、判じかねているもの。それががらくた。

ところで、大道具は宿命的に、ある日突然がらくたになる。近頃見かけなくなった古道具屋の土間にむかしは、塵にまみれて大道具箱が転がっていた。蓋のないやかんなどの半端ながらくたと一緒に。がらくた扱いで、大道具は大工の手を離れたとたんに古道具屋の手でがらくたにされてしまう。

大道具を詰め合わせた道具箱をかつて大工たちはおもちゃ箱と呼んでいた。棟領は大きな仕事を引受けるさい、手不足を補おうと何人かの未知の大工を呼び集める。さて日当

にいくら出そうか？腕に応じた相応の金子しか出したいくない。そんな時、棟領は集めた大工のおもちゃ箱を検分し、鉋の仕立ては如何、墨壺の彫りの腕は、ノミの研ぎにどんな砥石を使っているかなど、研ぎ仕立ての腕を、彫りでの遊び具合を、鉋・ノミ・墨壺などのおもちゃ箱の中身の道具を手にとって判じたうえで給金を決めた。

道具箱の中にはぎっしりその情報がつまっていたから、おもちゃ箱拜見で給金が決められた。ものには必ず、とくに道具には、ものに個々の情報が宿っている。もの情報だ。道具の所持者に関する情報までもっているが、大工道具箱に話っている情報はしかし、大工仲間には判読できない。素人には読みとれない触覚情報がもの情報の大半だからである。跡つぎの居ない老大工が死ぬ。女房これを道具屋に売る。すると道具箱はもの情報の読めない古道具屋の手で無残、がらくたにされてしまう。大工道具のような工具に限っていえばだから、がらくたな工具とは、工具のものも情報の読みとれない世間一般から、ねうちのいつまらないもの扱いされたものではあるが、古道具屋の店先で、一部の情報を道具から感じとった者の手に拾はれて、中途半端に所有されているものといえるかもしれない。

個人所有のがらくたの大半はこうした、中途半端な所有物が多い。世間一般のがらくた扱いに我慢がならず、さりとてがらくたでは無いとも決めかねて、いづれがらくたでないことを証明するつもりもあって、捨て去らないうがらくた箱に収納しているものががらくたにがらくた箱に収納して置か

だががらくたはがらくた箱に収納して置かないほうがよい。とわたしは思う。とくにものがらくたは。箱から出し、雑然と身近に散らかしておき、がらくたを人間と同居させて置くのがよい。つねづね手許に置き、手で情報を感じとる必要がある。

さきに触覚情報と言う言葉を使ったが、大工道具のもっている情報の大半は視覚情報ではなくて触覚情報だといいたくて、触覚情報といった。視覚情報は目で感じとれるが、触覚情報は手や身体の皮膚感覚でしか感じとれない。

わざわざ触覚情報のことをいい出したのは、いまを情報化社会といい、情報過多の時代ともいうが、マスメディアの能力限界からなのだろうか、現代の情報、視覚・聴覚情報に偏在している。味覚・嗅覚・触覚情報はマスメディアでは伝達不能。テレビ・ラジオ・電話・新聞・書籍の伝達しうる情報は、視覚・聴覚情報に限定されているが、だれ一人としてこうした情報偏在を疑の目で見ない。

がらくたなものは手許に置き、箱から出せ

といったのは、ものの触覚情報をじかに、ものから手で聴きとるための提案だ。経験に立った上での提案だ。私事で恐縮だがもののデザインが稼業なのでわたしの家には、必要があって、資料のつもりで集めた器・道具・工具類が山積している。古道具が多い。おおかたは文字通りのがらくた。ごみと一緒に捨てられていた鉋や道具屋で買った古いめし茶碗や譲りうけた秘郷の民具。錆びついた包丁もある。中に工具がぎっしり詰った下駄屋の道具箱、桶屋の道具箱、大工の道具箱もある。

ある日思ったってそれらの道具箱を職人を真似て担いで見た。すると下駄屋のもの、桶屋のもの、大工の道具箱も、肩に感じる目方はほぼ同じだった。興味を覚え、重量を測定して見た。いづれもほぼ同じで、一箱約十五キロだった。そして大工の道具箱の中には約五〇点の鉋や鋸や定規が入っていた。一点平均の重量は三〇〇グラムだった。驚いた。木工具としてこれは世界一の軽さだ。鋸は桐の柄にすぎた。鉋の台は欧米のような鉄の台ではなくて、木台。直線定規も直角定規もともに木製。桐の柄も木の台も木の定規も、これらはすべて重量軽減のためのつくりだった。道具箱の軽さはかつて日本の大工が移動する技術者であったことを証明している。下駄屋も

桶屋も、移動する技術者の歴史をもつという。

この道具箱の目方の軽さはその傍証になりそう。日本の木工具は、移動用に軽くデザインされていた。道具箱は担いで見た肩と手に道具の重量に関する触覚情報を伝えてくれた。重量はモノ情報の中でとりわけ重要な触覚情報だと思う。

かつてものの触覚情報は手頃さということばでいい表し、手から手へ、伝えられていた。手頃な腕といえば、その口径は一二〇ミリ、高さは六〇ミリ、目方は一二〇グラム、重心が低く、唇のあたりがよく、といった、握り心地使い心地の良いものが、手頃な腕とされていた。握った大きさ・重量・バランス・肌ざわり。これらが腕のもつべき触覚情報だった。腕はその色・柄・姿・つまり視覚情報よりも、径・重量・質感などの触覚情報をより重んじて、作り売り使われて来た。腕のよし悪しを触覚情報ぬきで云々することは、間違っている。視覚情報のみでは腕は論じられない。と判ったのも、拾うようにしてあつめた多数の腕を、がらくたな腕を身近に置いて、手で観てはじめて気付いたことだ。見た目が面白くて手許に置いたがらくたの腕が、思いもかけず、手に、かつての日本の食器に目方のデザインを含む、手頃さのデザインがなされてきたことをいみじくも教えてくれた。

腕の手頃な良さは、工芸展や民芸館では感
知出来ない。会場、展示場にお手を触れない
で下さい、と大書してあるからだ。腕は手の
届かぬガラスのケースに納めてある。手で観
ることは出来ない民芸館の陳列品をすべて、
手でも觀賞出来るような展示と運営に改めら
れないか。民芸は用即美だという。民芸品は
日用の雑器、使いこまれたその手頃なよさは
手にとって、使ってみてはじめて判然とする
はず。いや手にして見なければ、触覚で確か
なければ、民芸品の触覚美は觀賞できない。
紛失、損傷をおそれずに、図書館で本を閲覧
させるように、書棚の本の背表紙だけ見せて、
読ませない図書館など、一つも無いのだから、
日用雑器を見せる民芸館も、書庫に相当する
物庫と、閲覧室に相当する試用室をつくり、
本を目で読ませるように、器・道具を手で読
めるように、出来ないものかと、無理と承知
で提案したくなる。

工芸展、美術館のありように、視覚情報の
過信と、触覚情報の脱落をわたしは見ている。
がらくたの蒐集と所有でしか、道具のもの
情報、なかでも触覚情報は入手出来ないのだ
ろうか。逆にこうも考えられる。がらくたは
もの情報の唯一の伝達物であるとも。がらく
た箱はその宝庫であるとも。

がらくたの現代的な意義あいは、情報化社

会といわれながら、その情報が視聴覚に偏っ
ている現況下では、がらくたは貴重な触覚情
報のストックであり、その所持は触覚的もの
情報の所有であるからにはがらくた箱に死蔵
することなく、手近に置いていじくりまわす
ことに、展覧会、資料館などのありように反
逆しての触覚情報の発掘行動としての意義を
感じる。

がらくたは雑のさいたるものだが、建築の
主材が杉松樺であり、材木商が杉松のみに経
済価値を見ている世の中にあつては、樺は、
材質が樺以上であつたとしても、事実そうな
のだが、量と質が流通に乗りにくいという理
由から雑木扱いにされる。折々の産業や経済
の偏つたモノサシで測つて捨てたものが、雑
木・雑貨・がらくたの中に混在することがあ
つて、見える者の目にはきらりと光つて見え
てくることがある。論文に較べ、雑誌などに
見る雑文は、文字通りの雑なるものだが、そ
の雑なるものの中には折々の権威・学問・文
化のモノサシでは測り得ない真実が評価され
ずに雑の名で混入する。雑情報あつめ、がら
くた情報あつめの際には時流に乗つた権威・
学問・文化のモノサシを超えてこそ意義があ
る。視聴覚情報主導型の情報社会にあつては、
触覚情報源としてのがらくた集めをする必要
がある。がらくたの中から、時代を超えた経

済価値、学問体系、文化観を拾い出せるかも
知れない。偏見、先入観なしにがらくたを見
がらくたとじっくり同居して、その中から真
実を拾い出したい。

がらくたはなぜ増え続けるのか。世の中が
見捨てて省みないものまで拾いこむから、増
える。拾うために拾うというより、反逆の心
が拾わせる。手許のがらくたはなぜ減らない
のか。捨てざる理由が見出せないで、減ら
ない。捨てないから減らない。がらくたをな
ぜ拾いこむのか。がらくたは無用・雑然とし
たものだがそこに、作つたもの使つたもの
思いをかいま見て、人の思いを捨て去るに
のびず、ついつい拾い込む。人間の作つたも
の使つたものにはすべて強烈に人間の思いが
宿つていて、それは決して消え去ることがな
い。がらくたを捨てるにしのびないのは、も
のに宿る人間の思いを捨て去ることになるか
らだろう。

がらくた集めは人間の思いあつめだ。がら
くたと同居してくらすのは、他人の思いとの
同居。共感するくらし。がらくたとの対話は
触覚で成立つ。

がらくたは貴重な触覚文化財だと思う。

知の放牧場 ——がらくた箱

最高の権威は現実

うことはあまり教育してませんね。覚えろ覚えろの一点張り。公園などでも、みんなただただ大きな声出して教科書を暗記してます。あれは面白い光景ですけどね。

川喜田二郎 筑波大学教授／松本重治・加藤秀俊部会

西江雅之 東京外国語大学助教授

所有者には宝物？

川喜田 創造性は、自分を取り巻く情報をマスターすることから出てくるんですね。だから「がらくた箱」というのは、足元の情報を生かすということで世界を再構築するような非常に重要な問題を含んでいる。つまり教育の根幹であると……。これの対極にあるのが、ガリ勉、詰め込みの現在の教科書万能主義です。これが世界中に害悪を流している。とくに後進国へ行くほどひどくなっているんですよ。

西江 ぼくは物を持たないんです。主義じやなくて、もともと何も持っていないという

ことにすぎないんですが……。ですから物としての「がらくた箱」という話となるとちょっと弱んですが、がらくた性ということで、知識も情報も含めて考えると、たしかに問題は大きく拡がっていく。ところで「がらくた箱」という表現、これは他人からの言葉ですね。ある人は自分の収集物を「がらくたですよ」といいますが、これはけんさんも卑下も入っていて、自分のものを一歩外から見ているわけであって、実はその物は本人にとって最も重要なんです。それは子供と「がらくた箱」の関係を考えればすぐに判る。他人が見ると、まさに「がらくた箱」そのものなんです。子供当人の側からすればその「がらくた箱」の中身はその子の思考といったものがちゃんと組織化されているところで成り立っている。所有者、収集者にとって「がらくた」は宝物であるといえます。

川喜田 そう宝物、たいへんな宝物です。教科書万能主義の弊害は、一度誰かのフィルターにかかった整理整頓済みの知識だけを後生大事に教え込むことですね。そうした教育ばかりをするから、特に後進国や後進地方の場合は足元をバカにして、いいものは外にあるという感覚が育つ。こうした教育はやればやるだけ、ふるさととか郷土というものは荒廃していつて、人間がみんな都会に集まっちゃうんですな。

西江 アラブ諸国とかカリブ海方面で見たんですが、あちらでは自分なりに考えるという

の本質は同じことですね。

西江 ぼくはもともと生なまかかないところで生きている生主義者だから、逆に少し反省するところもあります。みんなの言う通りに従がっているほうが本当はいんじゃないかと思ったりして(笑)。

川喜田 現代人の悲劇は、物が生で見えなくなっていることです。たとえばすすきヶ原を歩いていくと丘の向うから月が上る。「あ今夜の月は美しい」と思うのが、美学的にもいいし、科学的にも正しい。美しい月を見

ていながら、天体とかアポロ宇宙船を考えるのはエセ科学です(笑い)。

西江 たしかに、最近の子供は月を見てもあれは天体だとか、何万キロ先にあるとか言っていて、ぼくらのような仕方では感動しない。

変だとは思いますが、ぼく自身小さいときから機械とか科学的測定とかいうものはあまり関心無くて、世の中をむしろ個人的情動面で生々しく見すぎる方ですからそういう科学的子供に強いことはいえない。世の中全体がこうなってきたと、ぼくなんかそろそろ時代が遅れてきたなと思ったりして負い目を感じてしまう(笑い)。今の子供にも夢はあるんですよ。近所の子なんか見ていると、きっちと出来ている怪物のプラモデルなんか集めてたりして夢見ている。でも全部既成品ですからぼくは夢見られない。ぼくの子供時代に友



川喜田二郎

達が集めていたのは、その辺に散っているがらくただった。それを集めて別の意味あるがらくたを作っていた。ところが今の子供の全部既成品で、しかも日本全国共通したも

のを持っていて。いったいどうなっているのかなと思うけど、実はそこを本気で掘り下げたことは無いんです。掘り下げてみたら、やはりこっちは時代に残り残されていたかということになるかもしれない(笑い)。

川喜田 もう一度、すすきヶ原の例でいうと「今夜の月は美しい」といった時には、自分も月も無い。感動だけがある。これが根元であって、二次的に反省して、自分と月、つまり主客が分かれる。つまり主客の対立は、いわば反省の産物であってね。二番煎じ。ところが、こうした主客の対立というものを、この世界を感じとる基本的フレームワークで

あるかのようにだました元凶がデカルトですよ。だからデカルトを徹底的にやっけないかんのだ(笑い)。

驚きと発見が大切

西江 要するに個人的な驚きがないんですね。ぼくらは何かに出会い、「ああ、いいものがあつた」と驚いて、そしてあつめて、ため

はじめるわけでしょう。いまはそうじゃなくて、早い話が、広告やマスメディアを通して物が全部出てくる、その物というのは完成品

とその部品というかたちで成り立っている。それに対して人々の欲求が出て、みんなはその欲求をただ充足させていくだけだ。そこには驚きもないし、発見もない。予期された目的に近づいてそれを完成するか、そこにいたらないかのどちらかしかない。その作業がうまくいっても驚かない。安心するだけです。うまくいかなくても驚かない。当人はあせるだけです。その時、驚くのは当人ではなくて、他人だけです。どうして、こんなことがこいつは出来ないのかな。って。ところががらくたの場合、驚きは当人だけのものなんです。人間自分が素直にならなければ、驚きも得られないんですよ。

川喜田 そう素直になることが必要です。

最近の私の方法は、折にふれて驚き感動したときの生のものを熱いうちにラベルにメモする。それを自分流に配列して整理する。これ、一種の「がらくた箱」です。順不同何でも書いてある。「昼飯うどん代二百三十円」とか(笑い)。だから感動しなければ一日中なにも書かないし、友人と十分間会っても、感動する話ならラベル十枚ぐらいパージと書く。

頭自体ががらくた箱

西江 そうですか。実は物に接する態度においては、ぼくは川喜田さんと非常によく似ているんですね。でも異なっている点がある。ぼくにはメモする習慣が無いんですよ。字が下手で自分の書いた字が読めないからです(笑い)。ですから自分で覚え込んじゃってる。三年ぐらい前にどこで誰とどのようにしてとか、状況を非常に細かく覚えてるんですね。自分の頭自体が「がらくた箱」になっている。

川喜田 いや残念ながら、私も十七歳ぐらいまでは人並み以上に記憶力がよかったです。十七歳ぐらいで突然記憶力が減退しましたね。それ以来、ほんとうによく忘れるんです。だから、西江さんのようなまねはしようと思っても出来ない(笑い)。

西江 でも、ぼくは人名とか駅の名前とか

は絶対覚えられないんです。ところが、景色とか情景はそのまま覚えていて……。視覚型なんです。その視覚型の記憶にしても、先ほど川喜田さんがおっしゃった折にふれての驚き、これは絶対に大切な要素ですね。ぼくが素直になると言ったのも、それとほぼ同じ意味なんです。

川喜田 折にふれて取ったメモというのは泥臭さがある。それがいいんです。つまり理論的に整理されていない、人間の悪知恵以前の生の味があるわけだ。常識的な理屈に包みこまれた壁を叩き破って、フレッシュに考え直すきっかけを与えてくれる。

西江 ぼくは、いつも自分だけにしか意味を持たないリファレンスブックを作れ、自身にしか適応しない字引きを自分の頭の中に作れということを言っています。考えてみ

たら、これは「がらくた箱」と似ているんだな。

自然物の中で育て

川喜田 なるほどね。そこで先ほどの西江さんの話し、最近では人工物が非常に出てくることに戻るんだが、人工物ばかりの中で育った人間というのはよくないですね。だいたい人工物というのは、これで儲けてやろうとかいう浅ましい魂胆で作られたものだから、こんなものばかり相手にしていると、世の中は悪知恵働かせて渡っていけばうまくいくんだという、悪悟りをするでしょう。だから人工の悪知恵の入っていない自然物を相手にしたほうが、素直な人間になると思うんです。教科書主義を撲滅するためにも、なるべく生

の自然なものと同じと親しめたいですね。

西江 そうですね。でも現在の傾向としては、たとえばおもちゃ屋で「がらくた箱」というおもちゃを売って出しても、何の抵抗もなく買う人のほうが多いんじゃないでしょうか。既成品の「がらくた箱」という箱の中にははじめからさまざまな既成がらくた品が仕込まれてあって、それを売っている。つまり、出来上がった「がらくた箱」というのが売られて当然であるという状況だと思うんですね。ところが本来、何を売って「がらくた箱」かというと、自分で集めたものじゃなければ「がらくた箱」とはいわれないんじゃないでしょうか。

川喜田 そうそう、与えられたものじゃ駄目ですよ。自分が一番気に入った石ころのかけらとか、針金とか木片とか(笑い)。
西江 手作りがブームだったって、部品が全部出来ていて組み立てるだけ。出来上がったものは同じです。下手か上手の違いがあるだけなんです。

使い方も大切です

川喜田 子供のうちは誰でもそうしたい癖を持つていますが、それが貯っていつかどう生かすかというところがうまくいかない。

パイプが詰まるんですよ。そうすると次第にフレッシュな感動とか興味が摩滅していくんです。だから「がらくた箱」はやはりうまく使わんといかん。

西江 そうです。一つ一つの驚きは全部がらくたなんです。がらくた箱と箱がつくからいいと思うんだ。なぜかというと、物が一つしか入っていない「がらくた箱」はない。一つ一つのがらくたを自分が集めていって始めて「がらくた箱」となるわけですよ。そうすると、その中に入っているものは全部自分なりに関連して、けっこう整然とした自分自身の何かの体系を形作っている。二、三歳の子供にしても、めちゃくちゃにがらくたを集めるわけではない。やはり、気に入ったものを集めているんですよ。ちゃんとそれなりに体系をなして、その子にとっての宝なんです。

川喜田 そして「がらくた箱」に集めるだけじゃなしに、ときどきその中のあるものを存分に使って、生かしてみろというんです。組み立てをやらなさいといかんです。それが伴ってくれば非常に価値がある。つまり、自分なりのアイデアで結構であるから、その材料の語るところを展開していくことを、一つの教育システムにしなさいかん。そうすると自分なりにこの世界をつかみ取る座標軸がで



西江雅之

きるわけです。その座標軸にそって自分の思

い通りに、すでに先人が整理済みの知識を吸収していくのであれば、教科書もたいへん結構なものです。だがこれが、誰にも簡単に出来そうであって出来ない。がらくた箱のいわば採集方法から組み立て方法まで、きっちと教育研修する必要がある。スポーツと同じですね。がらくた箱と馬鹿にしないで悪癖のつかないオーソドックスな基礎だけをみっちりやれば、あとは自分で腕を磨いて存分に自分の世界をつくっていく。実際、私は最近そうした教育研修の方法を作り上げたいです。そうしたら、すばらしい発想、ひらめきによって、自分たちの人生が素晴らしく楽しくなったという人が大勢出てきました。

一般論は難しい？

西江 がらくた箱を作るよりそれをどのようにに應用していくかとなると、たしかにたいへん難しいですね。本来、がらくた箱というのは、まさに所有者本人にしか適応しないものですから、その適応の度を高めるための一種のオーソドックスな修業も必要であることは確かなんです。が、がらくた箱というものが非常に個人的なものであるだけに、それをどう生かすかの一般論はまた難し

くなる。

川喜田 人間というのは、自分のほうに座標軸の原点があるから、対象の外側からしかみれないんですね。ところが対象をがらくた箱的に取材して、その材料の語るままに組み立てますと、誰でもが自然に対象の内部に座標軸を移動出来る。外からだけでなく、エンパセティックに物が見えてくるわけ。

西江 向うの気持が入ってくるわけですね。川喜田 だから逆に言えば、「俺のことだから俺しか知らん」という傲慢な態度ではなくて、誰でもつかまえて、「いったい正直なところ、俺がどう見える？」と聞けばいい。その場合、外の座標軸を内に持ち込むわけだ。他人の身に「なれ」とはキリストでも、釈迦でも偉い人物が皆言ったことだが、残念ながら凡愚の身をもってしては難しい。それががらくた箱的に素直に現実を見ていくと、誰でもが自然に相当な程度にまで他人の身になれる。これが理解ということなんです。だから出発点は先ずがらくた箱であると。

世界はすべて面白い

西江 ですから、そうすると難しいのは、いったい「がらくた」の詰まった大きな箱を作っても、しよせん集めている人ががらく

たであつたら何もならない(笑)。こういう問題が加わってくるわけですね。これはなかなか……。ところで、文化の研究を始める学生は、まず他の文化に興味を持つのが普通です。何かの書物を読んで、インドのなんとか村は実に面白いとか、南米の何とか族は面白い……。という具合に、そうした発想をするんですね。で、ぼくは先ず、授業の第一時間目にこう言うんです。「本当は世界は全部面白いんだ」と。実は、インドもアフリカも日本もどこも皆同じように興味あると。それじゃ、何が理由でそうした異国の小さな土地が面白いのかといったら、それは書いた人が面白いのであると、……。これは本当にそうなんです。事物は世の中にありふれているけれど、まだ自分に意味を持たないものと、ようやく自分の「がらくた」になったものと、その「がらくた」を生まれ変わらせて面白いがらくた箱に出来あがらせたものと、何段階かのものがあるんですね。とにかく世の中は本来は意味だらけですものね。

川喜田 がらくた箱の出発点である取材について言えば、——私は学者だとして、いろいろ学問的な関心を持つわけですね。それで関心をひき、感動を覚えたデータだけを集めていくと、「自分の仮説に都合のいいものだけしか集まらないだろう」と、多くの人が誤

解するんです。ところが実際やってみるとさうじゃない。自分の仮説に抵抗するためにどうしても気になる材料もある。大切なのは関心があるものは賛成材料でも反対材料でも、意外な材料でもみんな歓迎することです。それと間違えてはいけないのは、「きつとこうであつてはめ型とは違うんですよ。この二点はよく誤解されるんですよ。自分の関心だけで材料集めれば、都合のいい材料ばかり目に止まるでしょうな」。なんて言うのはそういうことを率直にやってみない人の言うことです。意外なものにも人間は関心持ちますね。

まず周囲をよく見る

西江 ぼくがこれまで述べてきたことを、一言でまとめてしまったならば、つまり、今こそ、みんな一人ひとりが、自分なりの目で自分の身の回りを見るべきだということでしょうね。見るといっても、人間は全視野を把握できないんですから、自分が何を見たかというそのこと自体、すでに「がらくた」を選んでいることになるんです。川喜田 私もその点、大賛成です。いまの世の中で、非常におかしいと思っているところがあるんです。それはね、「きつとこうであ

ろう」とか、あるいは、「こうであって欲しい」

とか、そういった自分の側の見解とか仮説、公式とかを、自分を取り巻く世界に当てはめてものを考えるという、当てはめ主義がはびこっている。これが一番世の中を悪くしているんだな。当てはめることそれ自体はいいんです。大工道具にたとえていえば、ノコギリ

を使うべき状況においてノコギリを使う……、カンナを使うべき状況においてカンナを使う……。これは立派な当てはめです。しかし、カンナを使うべきところを、意地をはってノコギリで押し通そうというのはおかしい。

西江 そうですね。いまは本当に当てはめの時代ですからね。しかし、そういうときに、もう少し、自分なりの目で見たいという人と、多くの人が、その言葉を、「もっと世間に反発しろ」「もっと抵抗しろ」という意味にとらんでいます。そういう意味じゃないんです。

自分なりに見るということは、もっと世界にくっついて、そこにあるものを自分なりに組み合わせて、自分なりの世界を作り上げるということを言っているだけなんです。それを、「自分なりに見ろ」というと「世の中に反発しろ」という風にパッと取ってしまう人がいるんですね。必ず言葉を逆にとらえます。これが意外に多いんですよ。だから結論もそのまま直結して、それじゃ個人主義がいいのか

とかになっちゃうんですよ。決してそうではないのです。さっきの川喜田さんの場合も、自分の好きなものを選ぶというと、それじゃ好きなものばかり集めて、他はないがしろにするのかと、そうした発想する人が多いのではないですか。

一期一会の精神で

川喜田 だから、状況にびったりの当てはめなら美しい。ビューティフルなんですな。ところが、そうじゃなしに、自分のほうの公式とか考え方で、無理やりに状況に合わないのに当てはめていく。だから、当てはめが悪いんじゃない。当てはめ主義が悪いんです。

この当てはめ主義に世の中が落ち込んでいるちゅうのが非常に問題である。それじゃ当てはめ主義に対抗するにはどうするかといえは、その逆を同じだけやればいい。当てはめの逆ですから、回りからみんな学ぶわけです。何でもキョロキョロ、何でもびっくりしてね。その状況が語るものに率直に頭を下げることです。これを日本流に言えば、己を空しくするということですね。あるいは虚心に物そのものを、状況それ自身をして語らしめよ、ですよ。これを単なるお説教ではなく、どういうふうにごく自然に生活の中で実行できる

かと。そこが大事だと思う。そういうのをお説教で言ってくれるのは、お釈迦さんをはじめいっぱい居るんですからね。じゃ実行するにはどうするかというと、それが物事から学ぶということですね。これが大事だと思うな。

その第一歩として「がらくた箱」というのは非常にいいことですね。理路整然とした、もっともらしい状況を押し売りされるんじゃないかと、一見ごちゃごちゃで何が何だか判らないというものの中に入ってやらなければ駄目なんです。それも、人工物に囲まれたような、文明世界がつくった謀略的状况を打ち破らなければ駄目だ、と私は思うんですよ。いかなれば、渾沌とした現実には、直接に素直に接して、そこから出発すればいいんじゃないかと言うことですね。

ゴールはどこかといえは、最後は渾沌の中

から、びったりの現実に対処することだ。それを日本では昔からどういつているかといえは、「二期一会の精神」というやつです。つまり二度とは繰り返されないようなタイミングに、二度とは繰り返されない流動的状况の中で、つまり、まさにしかるべきときに、まさにしかるべき場所で、しかるべく振る舞うという美学ですよ。結局、千利久とか本阿弥光悦とか、みんなそういうことをおそらく説いたんでしょ。岡倉天心の『茶の本』なんていうのは、この点でばくは大賛成ですね。そういうことの重要性を書物に書いて堂々と主張したのは、まず彼が嚆矢といえるんじゃないでしょうか。



野辺の『がらくた箱』

箱がらくたの楽しみ



松山 猛

エッセイスト

取るに足らぬ物、まともな用に供せぬ物、さりとて捨てるには忍びぬ、そのような物が身辺を埋めている。ガラクタに我楽多と当て字をした人は、なんと気の利いた人だったのだろう。まさに、人知れぬ楽しみの多い物が、我々のまわりに、なんとたくさんあふれていることか。

その所有者でなければ、何の感情を湧かせることもないような、道具や物もある。ガラクタと呼ばれるのは、たいていそのような物であることが多い。

時代が取り残してしまった物もまた多い。たとえば昭和二十年代から三十年代のはじめ頃まで、各家庭で使われた木製の氷冷蔵庫。それは電化ブームの時代に、すっかり忘れられてしまった道具のひとつである。

炭をおこす十能とせの、洗濯板、五ツ玉の算盤、それらはもって合理的な道具に、その座をう

ばわれ、すてられるか、納戸の奥にしまいこまれたままとなっている。

昔の家というのは、たとえ小さくても裏庭があったり、土足で往来する空間があったから、それらの品物は、縁側の下だとか裏庭の軒下などにしまわれたのだった。

そういう場所こそは、僕らの秘密の遊び場となっていた。僕らは近くの山の赤土層から掘り出した水晶の泥を、ガラクタ扱いされていた、古い金盥を探し出し、母親の許可をもらってそれに水を張って洗った。

働き者の母のために、父が真新しい洗濯機を買ってあげた、昭和三十年頃の裏庭の風景を、今でも僕は鮮明に思い出す。

蝉しぐれの夏の晴天の下、古めかしい京都風民家の裏の土間に、それだけが異様に新しい白さに輝く洗濯機があった。その頃はもちろん自動脱水装置などというものはなく、二

本のゴムの円筒のあいだに洗濯物を入れてしぼる、手動式の時代だ。そのしぼる作業がおもしろく、僕はいつもその役を買って出た。その洗濯機も、やがてはガラクタになる運命だろうとは、少しも考えられはしなかった。使いすて、買い替えの時代の、それはほんのトバ口だったのだ。

その頃僕らが愛した物に、グリコ・キャラメルという、オマケ付きキャラメルがあった。「子供は食べながら遊び、遊びながら食べるものだ」という発想のもとに作られたその菓子は、小さな取るに足らぬオマケのせいで、子供たちに人気があったのだ。

「くりま」という雑誌のために、グリコのオマケの変遷史を書いた時、なつかしいオマケの資料を見て、僕のコレクションの源流をかいま見た気分となった。

キビガラ細工の馬、一センチほどのキューピー人形、アンチモニー製の小さな蒸気機関車、セダン型の自動車、メダル、セルロイド製の蓄音機やラジオ。そういった現実世界のミニチュアが、どれほど僕らを刺激しただろうか。自分の指先ぐらいに縮小された、ありとあらゆる物の雛型で、ポケットをふくらませて僕らの世代は育ったのだった。セルロイドの豆カメラで、僕はカシヤットとシャッターを押し、父や兄がセミ版カメラで写真を撮

ることの真似をして遊んだ。それはかなり空想に満ちた遊びだった。ひよっとすると、十円で買った種板による、日光写真のリアティーよりも、さらに空想的な体験であったようにも思える。

僕にそのことを思い出させてくれたのは、他ならぬ僕の息子である。もうすぐ二歳と四ヶ月となる息子の遊びを見ていて、僕は自分の幼年時代へとフィードバックを果したのだ。

——完成という状態を求めるのは、大人の認識であり感情なのだ。ということ、僕は彼との遊びの中から発見した。

息子の玩具箱の中には、車輪がなくなった車。首のとれた人形、ビンの蓋、ちぎれた折り紙の用紙、洋服のボタン、その他約百種類に近いガラタがあふれている。

世間並に甘い父親である僕が、新しく買い与えた玩具よりも、むしろそういったガラタを使って、息子は上手に遊ぶのである。

——それは、何々をしている気分、の遊びなのである。三十男の当方は、たとえば鉄道模型にのめり込み、いよいよデティールに凝り、ああでなくては、いや、こうでなくてはといった、データの積み上げによる、知識の遊びと完成ばかりを目ざし、その実少しも完成に近づけぬ、空しい遊びを遊んでいる。

中味のなくなった乾電池をたてに並べて、

シンカンセンノとやっている息子のほうが、よほど遊びの天才なのである。

玩具箱がひとつでは足りなくなり、ついに二つ目を手に入れようという話を妻とした時、我々にとってガラタとしか思えぬ物を、もう一度吟味して、結局すてようということになったのは、ごくわずかな物でしかなかった。

ダイニング・ルームの食器棚にも、息子のガラタ収納用のひきだしをひとつもうけ、彼はハイハイ時代から、そこに自分の気に入りの品を出し入れて育った。食堂という、いわば大人中心の空間にも、彼が自由に使える場所をひとつもうけようといったのは妻で、それはとても息子に対して、良い結果を与えたとと言える。割れ物の並んだ棚に手を出そうとした頃、君のひきだしは下の方にあるのだと僕らは教えた。だからまだ、我家で割れた食器は、全て大人の責任によるのである。



僕の仕事部屋は、まさにガラタ箱そのものと化して久しい。京都から東京に来た時、たった一個のトランクとギターだけだったが、一ダースの年月のあいだに、身動きできぬほど物だらけになった生活を、僕は自分自身で呆心したように見ているのだ。

ガラス張りのキャビネットの最上段には、絵入り童謡のレコード、泥人形、カフス・ボ

タンなどのアクセサリー類のコレクション。

中段には鉄道模型、下段には珍しい煙草のパッケージ、一九二〇年代の靴、スパッツ、大正期の男の子用の羽子板。その右側のキャビネットには、版画やカード類、珍しい紙などのコレクションがいっぱい。四段になった奥行き深い棚には、今昔和洋の雑誌、写真集、旅をした国の地図。本棚は食堂にも進出していて、そこにもビジュアル関係の書籍、久生十蘭や織田作之助、へっぽこ先生川上澄生などの全集が並ぶ。

ただし雑誌や書籍のほとんどは、ガレージの書庫に収められているのだ。僕は車を持たない主義で来たから、本来ガレージ付きの家に住む必要はない。だが本の山を収納するには、他に方法とてなく、ガレージ付きの家に住まざるを得なくなったのだ。

雑誌類は、時折分類され処分されることもあるが、それよりもふえるテンポの方が早い。人口増加に悩んでいる国のようなものだ。

処分をしようと思いついて書庫に行く。そして一冊ずつ、もう一度いねいに頁をめくると、また思わぬ部分を発見してしまい、結局はすてきれずに積み上げる、そんなくりかえしのうちに、広告の流れや時代の流行現象、それに対する人間の反応が読みとれる。僕は勉強嫌いな性質ではあったが、昔から雑誌を

教科書に育ったようでもある。



すぐ整理された環境に暮らしている友人が、時々僕の家に来て、大混乱の度を増す我が書齋に座り、この雰囲気はたまらなく良いという。僕としては彼の整理された事務所に對するあこがれがあるので、人間はいよいよない物ねだりの生き物だと考えてしまうのだ。僕の所有物のうち、半分以上は人にあげてしまっても良いような物なのだ。昔は気が異常に良い方だったので、着ている服から身につけている時計、アクセサリー、なんでも気に入った人にあげてしまっていた。

ところが近頃手に入れる物の多くというのは、それを見つれることからはじまって、手に入れ、研究することまでが、一種の仕事と なっている。そう簡単には人にあげられない物がふえてしまったのである。

たとえば時計のコレクションとライカ・カメラ。時計のメカニズムに興味を持ち、古い時計のページを編集してみようと考えて、さて、集めた時計はひとつ三、百をこえた。そのほとんどを整理し処分するうちに、時計の何であるかがわかったし、ついにスイスまでくり出して、それが作られる現場を見て来た。

ひとつの興味が、次々に興味を生み、とこ

とんまで掘り下げるまで対象に迫る。結論として残ったのは、ジェノバ刻印という、最高級の時計にのみ与えられる、わずかに二ミリくらい刻印の有無なのであった。

しかしその間に、僕は時計職人たちの国の歴史、地理学を学び、スイスの現代を知るこゝとができたのだ。それは予想外の収穫であった。僕がおぼえて来たスイス料理は妻に伝えられ、我が家のメニューもふえる。たった一つの時計に興味を持ったおかげで、僕は実にさまざまな知識を知ってしまったのである。

その知識そのものは、ほとんど雑学の境を出ないものだが、僕には充分楽しいことだし、普通程度の生活を、その雑学で維持しているとなると、案外馬鹿にはできないとも思う。

ただしこうした興味の持ち方は、はなはだ不経済でもある。ちょっとした時間があると、このごろは写真関係の店に立寄り、いろいろな写真機材に夢中となっているからだ。ライカに興味を持ち、関係資料を読んでいるうちにはよかったが、ついに三台目の完成度の高い物にまで進んでしまった。ライカあたりになるとすでにガラクタではあり得ないが、それは僕の見解であって、たとえば妻の眼には、それはガラクタと映っているのかも知れないのである。私のようにいい女をさえ、まともにとれない腕しかないくせに、というのが彼

女の言い分なのである。僕は風景専門だから、人間はだめなんだと、弁解にこれつとめるが、そうしどろもどろの返答では納得してはくれない。次にはf11・0という、ものすごく明るく、解像力の良いノクテルックスというレンズを、我がM4-2につけることを願っているが、いかにも形勢は不利なのだ。



思うに我が棲家であるところの、この東京という環境そのものが、僕にとっては、巨大なガラクタなのだ。物を手にとるたびに新しい発見をしている子供のような眼で、この街を見るとき、そこには無限の遊びの空間が広がっている。子供たちの愛した原っぱはなくなってしまったが、その気になれば、あちこちの大通りや横丁に、人間の愛しき暮らしの姿が見えかくれしている。

東京も僕と同じように、整理をするのが苦手な都市のようであり、選ぶ場所によっては江戸が明治が、そして大正が見えかくれする。およそ日本の近代から現代までの文化を、系統だてて見ることはできないのである。

江戸期の閉国によって純粋培養された、固有の伝統文化と、明治期の英国や独乙からの輸入の様式、その後の和洋折中、戦後のアメリカ的な物質文化、それらが雑然と、しかし日本人には解りやすいかたちとなって、今日

の日本文化を織りなしている。

フェノロサや岡倉天心がこれが日本の美と言い切ったあの明治の美学だけでは、とうてい今日のこのガラクタ的な幸福の世界は語れぬ。当然その時代を遊びつくすことも不可能なのである。

さらに飛躍して考えるなら、この地球全体が、人間の夢の屑のようなものかも知れないと思う。実用向きではない美術工芸品、そして数々の廃墟。数世紀を経た建築物。忘れられることのなかった、しかし本来の意味が不明な習慣。多くの書物とそこに記された人間の愛憎と哲学。我々はその全てを知ること

できないが、無限に生産され、今また再生産されつつある、人間の夢を、それらの物からひき出すことをゆるされた者たちなのだ。

それはいささか不完全ではあるが、智のタム・マシンのような役割を果たすものだと僕は考える。一個の人間と、彼を取り巻く物との関係はそのようなものだ。未来は、すでに我々の暮らす部屋、横丁、街路から出現するにちがいない。

ガラクタは、単純な消費材としての生命を終えても、なおも人間に夢を与える性質を持った物の総称である。ガラクタは夢の糸を紡ぐ、メカニズムなのである。

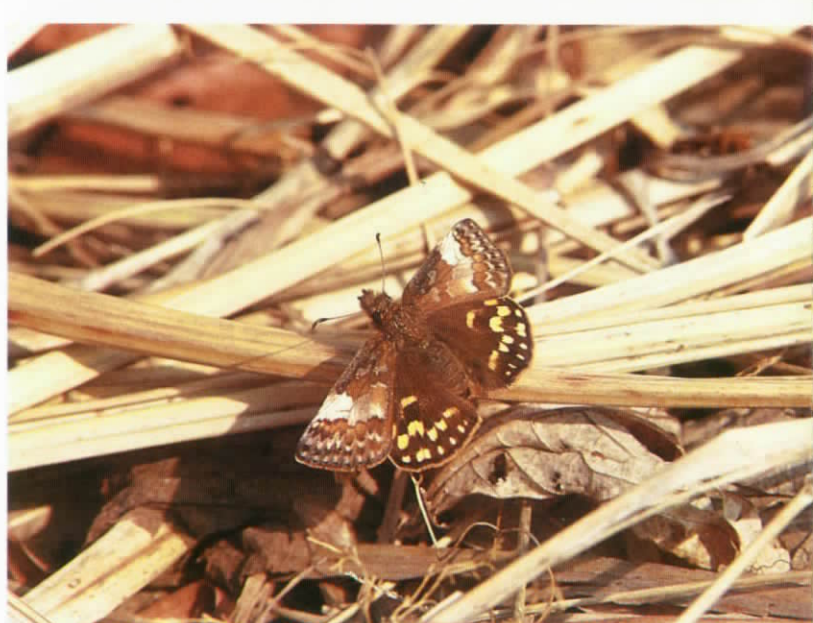


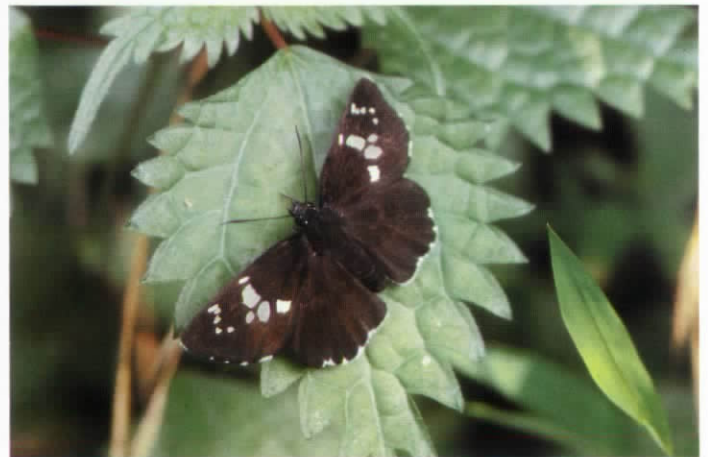
野辺『のらくた箱』

野辺の
がらくた箱









晴々ハウス

ハレ ハレ

佐賀和光

建築家 / 国際交流研究部会



で拾い集めるのです。大袈裟に言えば執念みたいなのがあるのかもしれないと、自分では思っています。

まったく未練たらしいというか、思い切りの悪さを絵に画いたようなものです。何事につけそういった性格がある事は、自分なりにわかっているのですが、どうもそれが私のガンの一つになっているようで、男らしくないというか、自分ではあまり好きになれない所です。

そう思いつつ自分の廻りを見まわしてみると、いたる所にそういった事物が多くあるもので、それが積もり積もって身動きが取れないといった状態は、誰にでもある事なのかもしれないですね。ですから使い捨ての文化などと言うのは、論理としては一応わかっているつもりでいても、真底からは理解出来ないものです。第一私自身にしては使い捨てしてしまうようなものは最初から手に入れないでしょうし、手に入れた以上は大事に暖め持って捨てるなんてとんでもないといった、もず的人間なわけです。にも拘わらず職業柄当然の事、

色々な住宅の設計を依頼されるのですが、そういった時に私はよく古いものはみんな捨てなさいなどと、平気で言ってしまうんです。まったく裏腹で申しわけないといった感じがしないでもありません。しかし心機一転新しい家に住むといった時は、古いものを捨てる最大のチャンスにはかなりませせん。本当に自分にとってどれが大切なもの、価値あるものなのかを見極めるチャンスなのです。そのチャンスを逃す手はない、そんな時はそうざらにあるものではないと、言いたいわけです。私も三年ほど前に新しい家に入りました。いざ引越しという段になって、どれもこれも大切なものに見え、本当にどれを捨てようかとさうとう悩みました。しかし一度決心がつくと後はかなりなもので、1トン車2台分のそれこそガラクタが、捨てられる運命とあいなつたのです。そして文字通り新たな気概をもつて、その新しい家に移り住みました。

そして三年が経ちました。そして前記のごとく模型飛行機の何がしかだけで押入三杯分、初めの内は住人のいなかったりする所に付いては通り越してはみ出し、いたる所にうす高くといった惨憺たる状態になってしまいました。まったくどうしたらいいのかと、途方に暮れている次第です。又新しい家を建てるなど、考えも及びませせん。いずれにしても一大決心をしなければならぬ時は、刻々と近づいてくる事は確かなようです。以上のようなわけで、私にとってのガラクタ箱即ち我が家、名付けて「晴々ハウス」なのです。

二年前までの私のガラクタ箱は押入三杯分、まだなんとかすれば形になるもの、もうどうにもならなくなってしまう残骸、そういった物がぎっしりとつまっていました。ほとんどが私が夢を馳せていた所の模型飛行機の材料であり、敢え無く墜落してしまった機体の破片であり、製作半ばで投げ出してしまった胴体であったり、翼であったり、いずれにしても、どうにかしなければと思いつつ今だに手が付けられずにいるものばかりです。

墜落してしまった機体の破片など、まだ修理すればなんとかなるものは別として、原型を留めないまでに壊れてしまった機体の破片

などは、誰が考えたって燃してしまうか、捨ててしまえばいいのにも思うのでしょうか、私にはどうしてもそれが出来ないのです。一度などそういった機体がたまりすぎ、本当にどうにもならなくなり、お坊さんにたのみ供養の経をあげつつ、泣く泣く燃した事があるくらいです。

その機体の一機々々に本当に愛着がある事にほか成りませせん。機体が一機出来るまでの手間は並大抵のものではなく、それがあつという間に墜落してしまった時の無念さは、なんとまたとえようのないくらい無念さなのです。お骨拾いよろしく小さな破片ま

現代がらくた箱考

■ 栄久庵憲司 GKインダストリアルデザイン研究所所長

■ 日下公人 日本長期信用銀行参与

誇り高き世界のがらくた箱——日本

日下 「現代がらくた箱考」というテーマに、とても惹かれましたね……。古い価値観からいうと、「がらくた」というのは褒められないという意味ですね。褒められない、しかし、何かあるだろうという着眼点が面白いんです。普通、「がらくた箱」というと、価値観が変わったために重要でなくなったり、捨てられたものの集合なだけけれど、これに「現代」が付くと話が変わってくる。つまり、現代には未来に向けての面白い萌芽が沢山あるんだけど、それを褒める物差しがまだ完成していないために、「がらくた」にされている。今日の物差しでいえば、昨日のものは「がらく

た」、そして明日のものも「がらくた」。しかし、明日になったら、また、がらりと変わってしまうということですね。——それですね。私は、かねてから世界における「未来的がらくた箱」は今は日本だと思っている。新宿、渋谷、地方の駅前繁華街などを歩くと、いつもそう思うんです。世界中、どの町を歩いても、こういう「がらくた」的な魅力のある所はありません。昔は世界の田舎者が、パリ、ロンドン、ニューヨークへ行ってキョロキョロしたんでしょうが、いまじゃ日本人が行ってもキョロキョロしない。日本が世界一がらくた的なんです。現代がらくた箱」と聞いてまずイメージに浮かぶのは、わが国の駅前商店街です（笑い）。

栄久庵 人間らしいものだからね。役に立たないと思っても、そばに置いときたいと

機能論を超えた新たな価値観の世界

日下 なるほど、実用性はないが、心の何かの支えになるわけですね。

栄久庵 ええ、昔から「無用の用」という言葉がありますようにね。まあ森羅万象どんなものでも、何らかのかたちで人間と繋がっ

いった心情があるんじゃないかな。役に立つものだけを置くのではきつ過ぎちゃう。孤独に打ち勝つには座禅組んだり、お経上げたりといった手法もあるんですが、スポーツ新聞を読んだり、観劇したりというのも、別の世界に泳ぐことで、淋しさに勝つというか、淋しさをそらすことの手法なんだろうと思う。そういう意味で、周囲に「がらくた」があるとすることは、一つ一つの「がらくた」というゲートを通じて、それなりの世界を旅行出来る。情報であれ、物であれ、粗大ゴミであれ、そうなんです。これが「がらくた」の存在理由じゃないだろうか……。もしかすると、今、われわれが話していることも「がらくた」かもしれない（笑い）。精神の旅行が出来ないと、どうしても生きる姿勢のバランスが取れなくなる。それは現代人の一つの哀れさであるとも私は思っているんですけどね。

ているんですが、それを整理して相当に捨て去ることの出来る人と、出来ない人がいると
思うんですけど、現代のこうした社会状況の中
では、整理し捨て去ることの出来る人のほ
うにむしろ危惧を感じますね。つまり、現代
人の体質が、そこまで強くなっているかどう
か判らないという感じがするんです。話は別
になるんですが、たとえば蒸気機関車ね。あ
れなんか粗大ゴミといえば強烈な粗大ゴミだ
と思うんですけど、ところが子供達にとって
みれば、あの粗大ゴミの中に時代の流れの一
つのジャンクションを感じている。つまり、
本当に役立っているときは情緒は作らないけ
れど、役に立たなくなった瞬間から、それら
が情緒を醸し出す……。

日下 実用性が薄れていくと、文化性が高
まってくる(笑い)。

栄久庵 私、最近、そうしたことで機能論
というのは、とても恐ろしい論だと思いまし
てね。役に立っていれば珍重されるが、役済
みになると「ポイ」と捨てられる。ちょうど
紙コップがそうですね。

日下 新幹線の紙コップ、あれ一番機能的
だね(笑い)。

栄久庵 機能論でいきますと、捨てられた
ものは「がらくた」以下になっちゃうんです
ね。ですから、こうした時代の中での「がら

くた」論は、むしろ機能論を超えたものの中
にあるんじゃないだろうかという感じもする
んです。でも、「がらくた」というのは、人そ
れぞれですね。

日下 そうですね。何でも「がらくた」と
見る人は、実は価値観の狭い人。生き方の狭
い人は何でも「がらくた」にして、大事なも
のそれ一つで済ませようとする。自分の生活ま
で効率化して……。学生でいえば、試験の山
だけ勉強するようなものだ。勉強を節約する
位なら、学校には行かなければいい。節約的
に勉強しようというのは矛盾ですよ。

がらくたの存在証 明が公害を生む？

栄久庵 ガラクタのすすめですね。私なん
か道具屋なもんですから、こういう風を感じ
るんですよ。つまり、道具が成仏しないから
ガラクタになる。「がらくた」になった道具と
いうのは、ずいぶん人のお役に立っていた。
かつて自分と絆をより濃く持っていた連中な
わけてすね——まあ、あえて連中という表現
をしちゃうわけですけども——。そうした
ものをがらくた化して無縁仏にするのがいい
んだらうかと。それこそ全部、火葬にして道
具寺に入れ供養しなきゃいけないんじゃない

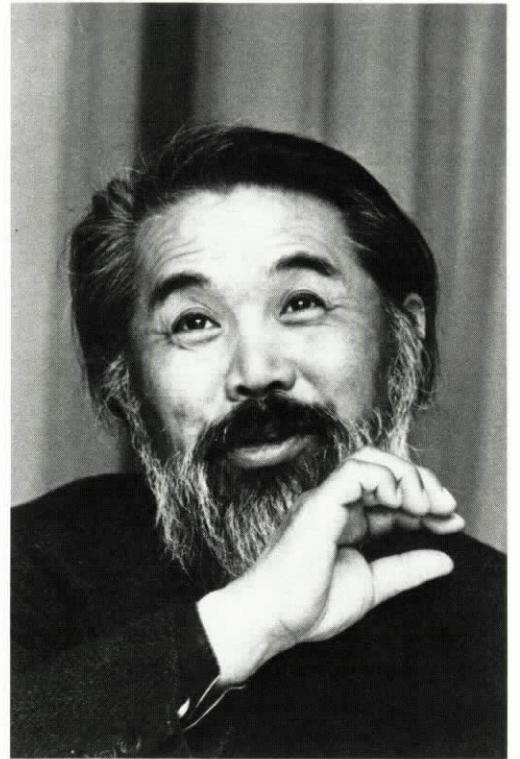
てもらっちゃうんだけど。

定年後は炭火ごた つを楽しんで……

栄久庵 お子さんがお酒を掛けたというの
はいいですね。私の気持の中では、「がらくた」
に限らず、森羅万象のものには、必ずなら
かの精神がひそんでいると……。だから、か
つて寝所を共にした「もの」(笑い)、どう
なっていくのか気になるわけです。そして
また、こうした気持も、これからの世代の子
供たちにどう伝えられるだろうかということ
もあるんです。

日下 私一度、一冬電気ゴタツをやめて、
炭火のコタツで暮してみたことがある。炭関





● 柴久庵憲司 ●

係の道具が「がらくた」になっていたので、

もう一度使ったわけ。すると今度は、電気ゴ
タツが「がらくた」になって隅っこにあるん
だな。炭で暮らすのは面白かったですよ。炭
火というのは、騙し騙し管理しなきゃ消えて
しまう。そこに技術がある。よくしてやれば
気持ちよくおこるし、つらく当たると消えてし
まう。生きものみたいなものですからね。ス
イツチ、ポンの電気ゴタツより、よほど楽し
みがあるんだ。まあ、定年退職して閑になっ
たら、これ専門にしようかと……。

柴久庵 ハハハ……。

日下 結局、忙しい現在は電気ゴタツにも
どっているが、炭火用の道具はわが家ではガ
ラクタでなく、出動待機中なんです(笑)。

敗者の退場への配 慮を欠く日本民族

柴久庵 日本民族は未来は語るんですけど、

どうも即物的すぎて、歴史観に対する希求の
念が弱い。それがこのイノベーションの時代
ですから、自分というものの再確認をするの
が非常に難しい。そういう時こそ、人の場合
も道具の場合も、歴史の中にちゃんと位置づ
けることが必要になりますね。

日下 アイデンティティーを確立するわけ
ですね。おそらく戦後日本の生活は、新しい
ものはどんどん降ってくるわ。古いものはど
んどん出ていくわで、人類史上、まれに見る
ほど変化の激しい時代だったから、「がらく
た」が一番多かったんでしょうね。新しいも

が入ってくるから、古いものは否応なしに
突き出されて行く。昔なら、親子孫三代使っ
たものが、三年ぐらいで「がらくた箱」に移
ってる。移ろいがあまり激しいと、やはり、
そうした足場固めの欲求が出てくるんですね。

柴久庵 嫌な感じが一つあるんですよ。そ
れはね。モノの世界における弱肉強食ではな
いかと。弱肉強食は動物の世界だけのことで
はなく、ある時代の思想から、台所用品の世
界に至るまであるんです。古い道具と、新し
い道具の代謝。そして、日本民族には、どう
も負けて退場する存在に対処する姿勢という
のが、どうも欠けているように思う。消費文
化がいわゆる前は多少あったんですがね。日
下さんどうですか？

放置したがらくた の醸造作用が……

日下 私はさっきの話のように炭ゴタツで
暮らしたし、一台の車を直し直し十二年間も使
ったり、ニワトリ飼って、自分の庭で取れた
地卵を食べてたこともある。このように、行
動的解決というのがあると思う。行動しない
でいろいろ言うのは、それはノスタルジアの
世界で、言うだけの人は、その夢に浸ってい
るのが楽しいんだから浸っていればいいので

はないか。その人にとっては思い出に浸って
いるのが解決なんだから。そこで多少観点を
変えますとね。商品でも、学説でも、イデオ
ロギーでも、すべて生まれた瞬間は実用性が
ないんですよ。だから一種の「がらくた」だ。
まあ普通の言葉でいえば「遊び、ふざけ」で
す。その内大部分はすたれるんだが、幸いに
して生き残り、世の中にはびこりますと実用
性が出てくる。こんなネクタイでも、最初は
スイスの兵隊が遊びで首に巻いたものが、こ
ういう風に世界に広がっちゃって、今では実
用性がある。間もなくすたれると思うが、そ
の時は寝間着のひもにしかならない「がらく
た」になっちゃうわけ。博物館行きです。た
だし、貴重な思い出、ノスタルジアのよすが
とはなりますけどね。

柴久庵 ところでですね。われわれの眼前
に広がる諸物は、何らかのかたちで人間の知
恵の一つの結果ですよ。ですから、たまた
ま引出しの中に捨てがたく置いてあったもの。
いわゆる「がらくた箱」は、しばらく放って
おくとその中で醸造作用を起し、そこからパ
ッと何かが生まれてくるんじゃないだろうか。
博物館などいい例です。博物館に入ると、数
千年前から現代に至るまでの人類の知恵が混
然一体となって醸造された空気を感ずるんで
す。先人の知恵、現代の知恵が歩み寄り、伝



● 日下公人 ●

今日のがらくたが 21世紀を生み出す

統を生かしながら、サムシング・ニューとして次の世界へ流れていく。たとえば、私は新しい時代の人力エネルギーに非常に興味を持ってましてね。そうすると遺された道具類から、過去の人力時代の素朴な体の動かし方とか、その生活のしかたというものが、フーッと思い浮かんでくる。それが何かの新材料と結び付いて、意外にもスーッと未来に生まれ変わって出ていくようなことが考えられるんです。

目下 また視点を変えてみてね。二十一世紀は何処から来るのか、やって来た時、われわれはそれを何と思うか。わたしはそれ

は「がらくた」だという気がする。たとえば、駅前商店街に行くと、われわれ中年の者からみると不急の妙なものばかりびやかにある。しかし、若い人にしてみれば毎日の必需品で、その無い町には住む気がしないのかもしれない。また現代の学生生活なんか、真面目な教授からみれば、まさに「がらくた生活」ですよ。要らんことばかりして、減多に学校に出て来ない。しかし、企業の立場に立って考えると、教授のいうことを全部覚えて、成績優秀な学生よりも、がらくた生活をたっぷりしてきた学生のほうが役に立つんですね。

栄久庵 たしかに創造行為のパターンとしては、「がらくた生活」というか、非常に多岐にわたる世界に入っていく意欲が、絶対に必要ですよ。刺激を求めて、役にも立たない

ことに意欲を持つ世界というのは、未来の「がらくた」に繋がるんですけど、一方、人間が築いた一つの歴史の結果をどう見るか、つまり過去の「がらくた」にどう対処するかの問題が非常に気になるんですよ。私は。

日下 気になるほど日本は新陳代謝が激しいんですね。インドにでも行けば切り替えが気にならないんでしょう。新しく生まれるものが多過ぎる時代……、多過ぎるか適当量か知りませんが、多い国、多い都市なんです。いまの日本は、スキーなんかで、自分の運動神経の速度よりもスキーが速く滑ると、だんだん体が後傾していく。運動神経のスピードが速いと次の変化を待ち受けて体が前傾姿勢になる。次のデコボコが早く来ないかと変化を待ち望むようになる。

がらくたを芸術に 昇華させた千利休

栄久庵 私はそうやっていく時代を気にしているんです。たとえば書店に行くでしょう。物凄量の情報です。全部が役に立つわけはないんですが、ある種の強迫観念にかられてしまう。そうしたことが周囲に跋扈することによって、誰もが後傾になっているんじゃないか、それをもっと前傾に持ち込むには

どうしたものだろうか……。

日下 いまの日本人は、けっこうみんな前傾姿勢になっているんですよ。現代の「がらくた箱」ときいてヒョットと思ったのは、日本は麻雀ルールが日進月歩で変わる国なんです。中国で発明されたものが何百年間、大して変化せず、大正年間に米国に広がって少し変わった。それが戦後日本人がやり出すと麻雀文化は千変万化の発達をしたわけです。日本人はこの二、三十年むやみと新しいルールを作り、それをすぐ覚えてやった。日本の麻雀というのは世界のどの国の麻雀とも違う全然別の遊びになっちゃっている。

栄久庵 遊戯といえば、文人墨客、狂歌を作る連中なんか、みんな遊戯の心の世界に身を投じたんだと思いますが、中でも冨えたる人というのは千利休……。考えてみると、彼はかわらけを集めて……。

日下 高値で売り付けた(笑い)。

栄久庵 「がらくた」を芸術の領域にまで持ち込むことによって高価なものとした。それは利休の強烈な性格にもよるだろうが、彼の中にある遊戯性が、「がらくた」という世界を一度皮むいて、あらたな一つの世界を築き上げたと思う。こうした場合、遊戯の心で泳ぐ人と泳がない人がいる。この「がらくた論」には、遊戯の心で生きていく人間の愉しみと

いうこともあるんじゃないだろうか。お茶やお花といった、やっても腹の足しになるわけじゃないが、それを魂の栄養剤に持ち込んだという、かつての日本文化の一つの流れみたいなものが、現代日本の社会体制には、ややもすると欠けているんじゃないだろうかと感じるんです。茶道なんか「なんだあんなもの」って言いながら、あれだけの家元がいて、みんな夢中になってやるという世界が存在する。

じゃあ自動車文化論や現在盛んな食事文化論からも、茶道、華道のような家元体制に匹敵するものが生まれるだろうかというあらたな興味がおきるんです。それと、今度の話の中で非常に重要なのは一種の自己主張なんです。ごちやごちやある「がらくた」を、ジッと見ているうちに、それを区別けしながら自分に繋げていくという人と、繋げないという人がいる。繋げないとすると、まさに文字通りの「がらくた」……。

無^レに有^レを見出す 素直な心が大切

日下 つまり、個体識別をしてやろうという興味とか、関心とか、体力がなくなると相手は「がらくた」になっちゃう。

栄久庵 ええ、それはとてもありますね。

そのあたりに、人間の忍耐強い感性というか体力のようなものが要だ。そのゴチャゴチャした「がらくた」が、人類の知恵が作ったものだと思うか、思わないか、人の知恵が作ったものとなると、その知恵のオリジナルな部分にフォーカスを当てられるかどうかというね。

日下 ちょっと経済学的になってすみませんが、現在の日本には、会社の数が全部で百六十五万社あって、まだまだ増えている。日本は会社の「がらくた箱」ともいえるんですね。でも、これが日本経済の強さになっている。麻雀も次から次へとルールが目まぐるしく変わった時が麻雀の全盛期だった。漫画週刊誌でもそうです。次々と創刊号が出て、見るに耐えないような妙なものが出まわって、頃が全盛になって、これが風格をもって統一されてくると、もう落目なんだな。そうした意味で、「がらくた」を一番多くやっている国が世界で一番早く未来に突入する。「がらくた」のない国は、それを真似するだけの二流国になる。「がらくた」の言葉のニュアンスには、非実用的、商品的に無価値、雑多とかの意味合いがあり、軽く見られがちですが、軽く見ようという自分自身の心が、思考節約的というか、閉鎖的になっているんです。個体識別する気がないから十把一からげに見ちゃって、

有用なものも見落とすんですね。もう一つ、「がらくた」には、きたないという意味もありますね。外形がきたない。「がらくた」扱いはされる。じゃ外形が綺麗なものはなにかと言えば、それは売れることを目的とした商品ではないか。商品はみな、小ざれいで、小ざつぱりしているが、売らんがためのものだから、そこに心は無い。こうしたものを目を奪われたいかんと、——「がらくた」であっても、未来には実用性を持つ「がらくた」もあることに注意するのも重要なんじゃないかと思う。

がらくたの語りか けを聴く時が来た

栄久庵 ちょっと極端な言い方になります。が、いま現在の時点で日本の断面を切ってみると、先ほど日下さんがおっしゃられたように、会社が百何十万もあって、一つの知的刺激と言えるかもしれないが、とにかく知恵が生きようが生きまいが、狭いグラウンドの中を無数の様々な邪鬼みたいなものが駆けずりまわって互に刺激を与えて創造活動を行なっている。戦後三十五年というのは、一つのこうした時代じゃなかったかという気がするわけです。頭のフローの状態ともいえる……。それで気になるのは、このフローをストック

に置き替えていこうという少し落ち着いた状態が日本民族の中に必要になってきているのではないかということなんです。リファイメントの段階にあるんじゃないか、リファインしないと、次から次へとただただ生まれてくるばかりなんです。

日下 なるほど。

栄久庵 したがって、品物でいえば一流品志向みたいなものが、これからのわれわれの中には必要なことじゃないかというんです。これから日本民族が生きていく場合、心の中にしっかりと腰の座りが出来るかどうか。それには、まずリファイアメントとか美意識の世界を一つぐらなければならぬのです。そうした意識において、これまで「がらくた」と称されていたものの語りかける言葉を、じっくりと聞いてみる時が来ているんじゃないだろうか……。つまり使い捨て時代は終わるからこそ、次々と何かを生み出さなければならなくなったのだと、「がらくた」の亡者たちが叫んでいるような気がするんですね。

『ザ・ライト・スタッフ』

トム・ウルフ著

中野圭二・加藤弘和共訳

中央公論社

昨年の暮、半月ばかりアメリカを廻り、機会を得て、フロリダのケープケネディ

やヒューストンにあるNASAのスペースセンターを見学しました。たまたまここに揚げた『ザ・ライト・スタッフ』を読みかけていたので、ここから飛び立った宇宙飛行士たちの心情を思い、興味がつきませんでした。

この本は、アメリカのマーキュリー計画に参加した、「最初の七人」と呼ばれるアストロノートたちの物語です。ライト・スタッフとは正しい資質と訳されておられ、それを備えた者だけが厳しい選別の中から残り得るといわれています。その資質とは、優れた能力や輝かしいパイロット歴だけではなく、その上に加味されるべき、もっと根本的な或る資質を指

し、言わく言い難いものであることが読み進むうちにわかって来ます。

この資質は、宇宙飛行士たちが誕生する以前から、飛行機のパイロット達の間で暗黙のうちに諒解されていたもので、予測を越えた如何なる事態に遭遇しても、驚くべき冷静さで刻々と迫る危機に対処し、最後まで最良の判断を放棄しない知性と勇気とでもいったらいいでしょうか。その具現者といえば、音の壁を破った男、アメリカ空軍少佐のチャールズ・E・イーガーがおり、パイロット達は競って彼の訛りの強い、少し眠たげな、冗談まじりの口調を真似したがったといえます。二七二ページ、小さな活字で、ぎっしりと詰ったこの長篇は、多少くどいところもありますが、単純な英雄物語に終ら

ザ・ライト・スタッフ

宇宙を翔ぶ男たちの栄光と苦悩

トム・ウルフ 著
中野圭二・加藤弘和 訳

高層を訓練に耐え、未知への冒険に挑むザ・ライト・スタッフ。その栄光と苦悩を描いて、文明と政治にゆがめられたアメリカの実像にせまる。

中央公論社

せることなく、極めてリアルに当時のアメリカの社会、彼等を利用する政治家たち、同様なスターに仕立てるべく躍起となるマスコミ、そして脚光の中で振り廻される妻たちの生活にもぬかりなくライトを当てて、アメリカそのものを浮かび上がらせています。

滞在中、国内線で操縦席からのメッセージが、いずれも、ちよつと眠むたげで、明るく、淡々たる語調なので、あつこれが例のイーガー風なのだなと思つたことでした。

——五代利天子——評論家／茅誠司部会

●東京はどのようにに改造・再生されるだろうか

遷都——二十一世紀の大イベント—新首都を建設して遷都をめざす国土庁の策定調査が公表された。超過密・巨大化が深刻になっている東京の改造・再生を図るのが狙いだ。同時になんでも東京への一点集中の害を除いて、国土の幅広い総合的な開発をしようというプラン。全首都機能を一括して東京圏外に移す「一括遷都」の場合、移転人口六十万、費用六兆五千億円。国会関係・民間関係・司法関係などを別々に東京圏外に移す「分遷都」で五十二万人、六兆五千億円。国会関係が東京圏外へ、残りは東京圏内の別の地域に移る「展遷都」は五十四万人、七兆三千億円。民間関係が東京圏外へ、司法関係などが東京圏内

へ移動し、残りはそのままの「展分都」は十二万人、二兆三千億円。六兆円というところ、一年分の公共事業費に相当し、筑波学園都市の建設費が一兆三千億円だったから、容易ならぬ大事業といえる。果して実現するかどうかは、国民の合意次第だが、ただ、日本の政治・経済・文化のあり方を、より民主的・地方主義的・分権的に改めない限り、できあがった新首都は、役人のための単なる小ぎれいな新都市にとどまり、やがて第二の東京になってしまふのではないか、その指摘を十分考慮に入れる必要がある。

●孝人を現役に組み込んだ新しい社会の発想

老人大国——これまでの予想をはるかに上回る急ピッチで高齢化社会は進み、四十年後の二〇二〇年には六十五歳以上の老人が、現在の倍以上に当たる二一・八パーセントを占めるという「日本の将来人口新推計」が、厚生省から発表された。この数字は、次のピークの二〇四三年には二二・二パーセントに達すると予測され、二〇七五年ごろには一九—二〇パーセントで安定するとみられている。国民の五人に一人が高齢者という世界有数の「老人大国」になるわけで、この結果、生産年齢人口（十五—六十四歳）が扶養する老人は、現在の七・四四人で一人の割合に対し、ピーク時には二・七人で一人を支えることになる。

また、年少人口を含むと、働ける年代の十人で、七人弱の老人・子供を養う、重い負担になることは必至だ。こうした時代を迎えるに、医療・保健、年金など、社会保障政策を見直す必要に迫られるのは当然としても、高齢者を働き手としてどう生かすか、が大きな問題となる。こうしたなかで、東京都社会福祉審議会の「新しい発想の老人対策」という提言が注目される。老人を特別扱いする敬老型福祉から脱皮し、「社会の一員」としてとらえようとするもので住宅・交通などの面で、老人を「生かす」施策を望んでいる。

●21世紀には日本のGNPが世界一になる?

GNP世界一——二十一世紀には、日本人の一人当たりGNPは世界一になる—との景気のよい予測が、経企庁から発表された。「日本は、先端技術面での優位をいぜん保ち、高貯蓄率も維持できる」との見方から、他の先進国より高めの成長を期待できる、との判断による。この試算では、今後二十年間の年実質成長率を世界平均で三・五、日本は五、日本を除くOECD各国三、中進国七、途上国四、共産圏諸国三・五パーセントと仮定する。この通りにいくと、二〇〇〇年には、日本のGNPのシェアは一三パーセント（現在は一〇）に高まり、一人当たり二万一千五百十ドルで、アメリカの一万七千六百ドルを二

二パーセントも上回る勘定になる。もつとも、日本がこのように経済的地位を向上させるとしても、アメリカはなおGNPシェア一九パーセント、ECも一八パーセントを占め、強大な力を持っていることにはかわりはない。一方、中進国・途上国もシェアを一九パーセントにあげるが、人口増加などから南北の格差は逆に開いて、深刻な国際問題になりそう。日本にとつての不安材料は、世界でもまれな高齢化社会を迎えることによって、経済の活力を失う恐れがあること、若い世代が勤労意欲を保つかどうかに繁栄のカギがあるといえそう。

●夢の未来エネルギーは南太平洋の小島から

ポルシェ計画——水素は便利で理想的なエネルギー源として、ポスト石油の代表的な成長株だ。燃焼させると水になるだけで公害とは無縁、原料は無限の水、輸送や貯蔵もラク、自動車・飛行機の水素エンジン、燃料電池の原料、発電所でも使えるといった魅力にあふれている。ところが、この水素をつくるのに多大なエネルギーが必要とあつては、代替エネルギーの資格はない。そこで、安価、大量に水素をつくる技術の開発が、各国で競われている。なかでも、横浜国大の太田時男教授が中心になって研究している「ポルシェ計画」が注目のマト。海上に二辺二〇メートルの大型イカダを並べ、上に太陽熱の集光装置を

載せ、そのエネルギーで発電して海水から水素を取りだす。太陽光線の強烈で、波静かな南太平洋が適地だ。この計画を知ったペラウ（パラオ）共和国から「ぜひ実験候補地」との招きを受けた太田教授ら調査団が現地を視察、都合のよい島を見つけてきた。構想によると、約五十億円で一〇〇キロワットの発電能力を持つイカダ一基を浮かべ、一日当たり二〇〇立方メートルの水素を生産して沿岸の島に送り、アンモニアやマーガリンつくり、新興国の国づくりなどに二役かうという。未来の燃料への着実な一歩となりそう。

●10年後には召使いロボットが出現する、

家庭用ロボット——日本が世界に誇る最先端技術の一つ、産業用ロボットは、いよいよ精密に、賢く、なって、知能ロボットが登場する時代になった。物を見たり、さわったりして判断する能力を持つロボットは、すでに溶接用に実用化されているが、各企業は組立用の開発に全力をあげている。女子工員の組立作業にかえ、知能ロボットを使って二十四時間無人操業する工場を構想している企業もでている。知能ロボットが実用化されれば、なにも工場で働かせるだけでなく、家庭用ロボットが現われてもおかしくない。通産省が描いた十年後の近未来情報社会でも、主役の一つに、家庭で主婦の雑用を片づける知能ロ

ボットをあげている。視覚・触覚と、人間の手足のようになめらかに動く関節をもったロボットが、SF映画さながらにテキパキと雑事をさばき、家庭用電算機、光ファイバーで結ばれた情報処理システムとともに、未来の家庭を構成する。電算機でガス漏れ、漏電、防火、防犯の警報装置を管理し、空調もこなすロボットハウスはすでに販売されており、また、音声の指示をききわけて、飲み物・食べ物を取り出し、患者の口元まで運ぶロボット、寝たきりの人を抱きあげて風呂に入れたり、出したりするロボットも姿を現わしている。

●数時間後に「大地震発生」と告げられたとき…

地震予知——近い将来発生すると恐れられている東海大地震の予知が可能ではないか、との研究が、茂木東大教授によって発表された。昭和十九年十二月七日、愛知・奈良・三重・岐阜・静岡などに大きな被害を与え、千人近い死者をだした東南海大地震の直前に、静岡県掛川市付近で、たまたま陸軍の測量部が、水準調査をしていた。このため、地震直前の一日間に水平距離七〇メートル当たり四・八ミリの隆起があった」との記録を残すことができ、このことから東海地震は予知できるのではないかと期待を生んでいた。茂木教授は、さらにその前後の記録を、当時観測にあたった職員の手記から発掘、解

析し、地盤は地震の三日前から変化しはじめ、三日間で三ミリ、一日前には四・八ミリと急激に隆起した事実をつかんだ。この程度の変化は、現在設置されている機器で観測が十分可能であり、この動きをつかむことさえできれば、「近日中に地震」、さらに「数時間以内に地震」との警報を発令することもユメでない。東南海地震は、熊野灘を震源とする海洋性の巨大地震であり、予想される東海地震と同じ型であるだけに、地震予知の可能性は、かなり高いという。この研究によって、防災計画もかなり、地に足のついたものになりそうだ。

●「よめよめ」カーが登場する日本の地下鉄

ミニ地下鉄——トンネルの掘削に費用がかかるのが原因で、一キロ当たりの建設費が二百億円を超えるという地下鉄工事。この調子だと、よほどの大都市でない限り採算が合わなくなり、これから建設にかかる大都市では、手が届かなくなる恐れがでてきた。このため、省資源・省エネ時代にふさわしいミニ地下鉄の研究が進められている。日本地下鉄協会のミニ地下鉄構想によると、トンネルの大きさは直径五・一メートルで、東京都営新宿線の直径七・三メートルに比べ、排土量は半分ですみ、四割安くなる計算。車両は高さ三・〇五メートル、幅二・五メートル、車体長は一メートル。断面積は七・〇九平方メートル

で新宿線の一〇・七八平方メートルのざっと三分の二。定員は七十人で半分になるが、この方法だと工事費はキロ当たり六十一百二十億円ですむことになる。財政事情から着工が遅れている東京都営十二号線は、この安上りのミニ方式で建設する方針が固まっており、風圧実験に入ることになっている。二五キロの環状部分と一三キロの直線部分からなる十二号線は、旧グランドハイツ跡地のニュータウンの足となるもの。ロンドン、パリなど、ヨーロッパではミニ地下鉄がすでに実用化しており、日本でも十分の働きを見せそうだ。

●手掘りの防空壕から核シェルターへの道程

シェルター——核攻撃を受けても生きのびるための「シェルター」を、ゴルフ場の地下につくる計画が発表され、物議をかもししている。神奈川県が、二宮町のゴルフコース駐車場の、縦六〇メートル、横二二メートルを、深さ五メートル掘り下げ、厚さ四〇センチのコンクリート壁で固めた防空壕をつくる。出入口は気密性の高い三重の扉で仕切り、もちろん浄化装置も完備する。五千人が一カ月生活できる食糧などをたくわえ、まさかの時は会員のゴルフカー、従業員、近くの人たちがたてこもる。建設費五十億円は入金の一部をあて、来年中に完成させる予定。「核戦争いざその時は…」という発想自体が、

平和運動の立場からは許しがたく思え、非惨な核の被害の実態を知る多くの国民の目には、かかない努力がとうつるかもしれない。しかし、現実主義者たちは、「直撃されればひとたまりもないとしても、備えのあるなしで生存者の数が大きく違ってくる以上、努力するのは当然」との考えをとる。二億の人口を持つアメリカが、無防備の場合は一億六千万人の被害者をだすが、本格的シェルターがあると、二千五百万人に被害者は減る、との計算があるそうだ。ゴルフ会社の「杞憂」が投じた一石が、民間防衛を真剣に考えるきっかけになるかどうか。

●借りに暮らすのが常識となる時の生活様式は

総合レンタル——「もの」がこれほどゆきわたると、何でも買い揃えて持つことにこだわらず、買わずにすませ、借りて豊かな暮らしをめざす消費者の手工が働いてくる。リースと呼ばれる、企業向けに機械や設備を長期に貸す制度に対し、主に個人に短期間、耐久消費財などを貸すのがレンタル。貸し布団やレンタカー、貸し本、貸し自転車などは、すでにおなじみだが、最近はその範囲がぐんと広がり、スプーン、おもちゃ、ペーパーベッド、乳母車、ビデオ、カメラ、テレビ、スーツケース、カラオケ、松葉杖、晴れ着、日曜大工用品と限らない。総合レンタル店は、数百点から二千点も揃えてお得意様を待っている。ア

コム、ダスキン、白洋舎、西尾リースなどは、多店舗化に乗りだし、この将来性豊かな市場めざして、全国展開を図っている。料金のつけ方は、各社の企業秘密だが、当然、長く借りた方が割安に設定されている。しかし、あまり長いと、結局、買った方が得ということになる。しかし、置いておけば場所をふさぐだけで、再び使う機会が少ないペーパーベッドやスーツケースなど、また入院時のテレビや冷蔵庫は、借りた方がはるかに得といった計算になる。百貨店もこの分野に進出しており、新しい生活様式は定着していきそうだ。

●老兵は消えさる？ ウサギ小屋整備事業発足

木賃アパート——ギンギン鳴る階段をあがれば四畳半一間、隣室との壁はうすっぺらで音はつつぬけ、窓をあければ隣家がすぐそこ、風呂はなく、台所や手洗いは共用。たちまち、こんなイメージがわいてくるのが木造賃貸住宅、略して木賃（もくちん）アパート。全国で七百万戸以上、住宅総数の五分の一が木賃アパートといわれている。この質の悪いアパートを一掃しようと、建設省は五十七年度から「木賃住宅地区総合整備事業制度」を発足させる。東京、大阪、名古屋の都市圏の、二〇ヘクタール以上の広さで、木賃アパートが密集している地域を「総合整備地区」に指定し、整備計画をつくる。この計画に沿って

家主が建てかえる場合は、取り壊し費の一部や設計費、共同施設の整備費を国や自治体が補助する。また、特別の「密集地域」では、自治体が買収、入居者を公営住宅に移し、取り壊し、環境を整備したうえで、経営者に返し、アパートを新築してもらう。居住条件が悪いとはいえず、都心に近くて便利なのが木賃アパートの利点。環境を整備して住みよい住まいが確保されればいいことはない。ただ、この種の再開発は手間と時間がかかるのがない。十年がかりの事業というが、果して程度の悪いウサギ小屋の追放がうまくいくかどうか。

●庶民も業界も熱くみつめる国民住宅の始動

ハウス55——通産省と建設省が、国家プロジェクトとして計画を進めていた、良質で安い国民住宅「ハウス55」は、三社の製品が勢揃いし、住宅事情打開の目玉として成長しそうだ。昭和五十年に、セントラルヒーティング付き、一〇〇平方メートルで五百万円台という開発目標をかかげ、五十一年に民間企業による技術提案競技によって動きだしたこの計画は、当初、五十社を越す会社・系列が応募した。このなかで、まずコンクリート系のミサワの製品が、五十五年十二月に承認された。一〇〇平方メートルで八百八十万円、一般のプレハブに比べて三〇パーセントは安いとの線に抑えて人気は上々、月百戸のペース

で生産されている。承認第二号はナショナル住宅建材。金属系で、これも一〇〇平方メートル換算八百八十六万円。五十七年は五百戸の目標でスタートする。最後に木質系の小堀住研が企業化を申請、六、七月には八百九十万円で発売、初年度五千棟をめざしている。五十六年の全国建築着工数は百五万戸で、前年より九・二パーセント、十二万戸の大幅減少だった。冷えきったこの住宅市場の救世主として期待されるハウス55、他の住宅の価格の抑制という効果もあけて、庶民の持ち家へのユメを果してくれるだろうか。

●食欲に関しては足りるを知る？ 日本人

日本型食生活——欧米先進国には一五〇キロを越す、まさに巨大としかいいようがない肥満者が少なくない。この文明病の治療法として、食欲を低下させるため、空腸起部と回腸末端部を接合、短縮する手術が、盛んに行なわれているという。一方、日本人には、この様に極端な肥満はまれであるばかりか、公害に汚染されているとの嘆きにもかかわらず、平均寿命は世界の一、二位を争う長寿国を誇っている。これからみると、戦中戦後の慢性栄養不良型の改善がすすみ、日本人の食生活は、いま理想的バランスの時代にあることを証明しているようでもある。ただ、このまま食事の欧米化の道を歩むとすれば、過剰栄養

の悩みを受け継ぐことは当然避けられない。ところが、厚生省がまとめた五十五年度の国民栄養調査によると、栄養過多の傾向は減り、栄養のバランスもよく、理想に近づいている、という。熱量の平均摂取量は一人一日当たり二〇八四カロリーで、四十六、七年の二三〇〇カロリーより落ち、戦後ふえつつけた肉類は減り、九年ぶりに米の摂取量が上向いた。食塩の取りすぎが指摘されているものの、日本人の食生活は、限りなく理想型に近づいており、肥満も減って、こと食生活に関しては明るい未来像が描かれている。

●男性学が不在だから女性学が成り立つ——？

女性学——人間としての女性尊重の立場から、学際的に女性およびその関連の諸問題を研究する学問（「日本女性学会設立趣意書」）への関心が高まっている。アメリカでは正規の大学講座として取りあげられ、女性学で学位を取ることもできる。日本では、一部の女子大で講座を開いているにすぎないが、公開講座や、社会教育として地方自治体の公民館での開講など、次第に広がりを見せている。出版の世界でも、女性史、女の生き方の本が相次いで出されている。なかでも、昨年完結した「日本婦人問題資料集成」（ドメス出版）全十巻は、企画以来十年の歳月をかけ、千六百点の資料を集め、女性学研究の基礎文献と

して見逃せない。京都には、こうした女性問題に関する本ばかり揃えた専門店も登場している。六〇年代後半のウーマン・リブから七〇年代のフェミニズムまで、自立をめざす女性たちは「男女平等」を声高に主張してきた。労働省の男女平等雇用法に関するガイドライの発表など、その成果は着実にあがってきている。とはいえ、一方では運動自体、下火になっていく面も否定できない。その中で、もっと地道に、自分自身の問題として、女性のあり方を考えようとする人たちが、女性学を学ぼうとしている、といえそう。

●野球ファンが空模様を気にしなくなる日

屋根付き球場——雨のため野球は中止。ファンをがっかりさせるのが憎い雨。かささえあればこの悩みを解決できるとあって、屋根付き球場が日本にもお目見得しそうな風向きた。五十四年に、名古屋の工場跡地に計画された「ノリタケドーム」は足踏みしているが、最近になって各地で実現をめざす動きがはじまった。川崎市は、老朽化した川崎球場を大改造する予定だが、三百五十億円かけてのドーム球場を研究中。いま人気の西武球場では、屋根をかける案が、あたためられている。工期二年で総工費七十億円とか。一方、東京都は、埋立地に六万人収容のドーム型多目的スタジアムの建設をもくろんでいる。費

用はやはり二百五十億円。このような動きに応じて建設会社の商売も相当なもので、大成建設は、既設の球場に八十億円ですっぽり屋根をかける「TSS工法」の名乗りをあげている。開口部が十分なために空調設備は不要で、照明も既存のものが使えるのが強味。竹中工務店は米社と技術提携し、キャンバスを空気で、あるいはロープで支える「膜構造システム」を売り出し、すでにかなりの引き合いを得ている。あとは、法規との関係と費用の手当てだけで、雨にもめげず野球試合のユメは近い将来、ユメではなくなりそう

●現代は素材がファッションをリードするのだ

新素材ファッション——先端技術の分野で脚光をあびている新素材という言葉が、ファッションの世界にもはなはしく登場して、若い人たちの目をひきつけている。その一つは、米・スリーエム社が開発したシンサレート。同じ厚さなら羽毛の二倍の暖かさをもった断熱性の中わたで、極細の合成繊維を複雑に組み合わせ、保温に一番有効な空気を大量に取り込む能力をもっている。帝人のアイザック、フェニックスのSP27、日本バイリーのバイウォーム、東レのサンステートなども同種の商品。従来のダウンやポリエステル綿は厚手で、縫製しにくかったが、この新素材はその点が改良されている。一方、雨はは

じくが、体内からの汗は発散させる、むれにくい防水加工布として人気を集めているのが、米の特殊電線メーカー、ゴア社が開発したゴアテックス。テフロンを極細の網状の膜にし、水滴ははじくが、気体は通すのが特徴。国産でも東レ、帝人の製品が出回っている。これらの新素材を合わせて商品化するのがスポーツアパレル、一般アパレルメーカーの腕で、ポストダウン商戦は激化しそう。モコモコ着ぶくれのスタイルから解放され、薄くてデザインも楽しめる防寒着としてのスキージャケット、タウンウェアが街をかざりそう。

●日本人をはぐくんだ照葉の緑が絶滅寸前！

照葉樹林——ヒマラヤから雲南、四川を通じて西南日本につながる一帯は照葉樹林地帯と呼ばれる。表面がツヤツヤと光沢のある葉を持つクスノキ、カシ、シイ、タブ、ツバキなどの常緑広葉樹が、本来なら一面に地表を覆っていたはずだ。そこに住む人たちは、ドングリ、クス、コンニャクの採取、水さらしの技術、ヒエ・ダイズ・アワ・キビなどの栽培、竹細工・桶の製作などの文化をもっていた。ところが、日本の原点ともいべき照葉樹林が消滅寸前だという。環境庁の発表では、全森林面積の〇・〇六パーセント、三千八百三十三カ所、約一万六〇〇〇ヘクタールしか、照葉樹林は残っておらず、しかも、大規模な

群落は少なく、面積の四七パーセント、四百二十八カ所が鎮守の森や社寺林であるとのこと。農耕社会の発展とともに伐り開かれていき、とくに近年の大規模な開発によって追われ、山林もまたヒノキ、スギなど材木として利用価値の高い木に植えかえられていった。照葉樹は、日本の国土に適している木だけに保水・防火・防風などの能力にすぐれ、手間もかからず繁茂する。いま、大工場の敷地などの緑化に、照葉樹を植えて森をつくる試みが地道に続けられており、失われた原生林にかわる人工の照葉樹林に期待がかけられている。

難題山積、一步誤ると波乱万丈に

岡村和夫氏に聞く

NHK解説委員／茅誠司部会

——ことしの政治は大きな動きが予想され、早くも国会で前兆が出ていますが

「通常国会は三月一杯で翌年度予算の成立をはからないといけないので、政府としては重荷を負った国会です。その一番の眼目の予算案がたいへん評判が悪い。

野党はとくに防衛費の突出、減税、歳入欠陥の三点を問題にしている。防衛費は、文教費や社会保障費などに比べて伸びが大きすぎ、福祉切り捨て防衛費の突出じやないかと。減税では、この五年間も課税最低限が据え置きで実質的な増税となっている。勤労国民の家計を守るためにも大型減税が必要だ。これは景気浮揚、通商摩擦解消のためにもやるべきだというのが野党の要求です。実は政府、自民党内にも心情的・論理的に同調する面もありましてね、貴誌が出る頃にははつきりしているでしょう。そして歳入欠陥、これがないへんなんです」

——少し、具体的に

「政府は五十九年度までに赤字国債五兆四千八百五十億円を解消し、五十六年度は赤字国債を増発しないといってきました。それが昨年暮れ、税収の落ち込みから補正予算で三千七百五十億円の赤字国債増発を決め、これで五十六年度予算は間に合うといったんです。しかし、ことし六月に帳尻を締めると、それだけでは納まらないですね。人によっては一兆円とか一兆五千億円の税収不足になると

みえています。ところが渡辺大蔵大臣は国会でたいへんなことをいってしまった。補正予算で間に合いますと、もし六月に歳入欠陥が明らかになったら政治責任をとるといったんです。これは五十七年度予算に関連してきますから、たいへん議論の多いところで、たとえ国会を無事に乗り切ったとしても、六月に歳入欠陥が実際に明らかになると大問題になるという事です」

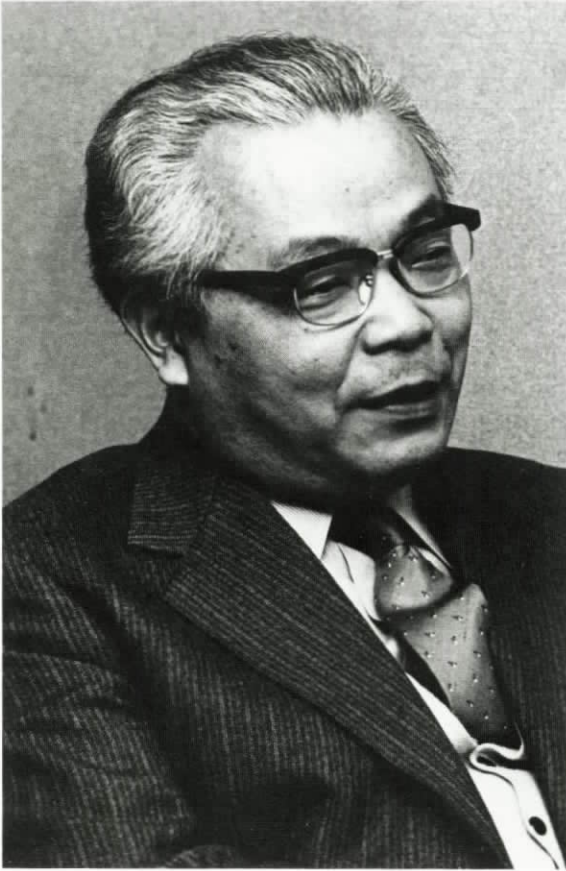
——財政再建はむずかしいと

「五十九年度までには無理、あと三年繰り延べすべきだという提言も出ていますし、これから議論となるでしょう。さきに大蔵省が出した中期財政展望では、五十八年度三兆三千七百億円、五十九年度五兆六千八百億円の歳入不足になる、増税はしない、赤字国債は減額するでは歳入は足りませんよと数字で示しています。五十七年度も予定どおり税収が上がるかどうかもあるし、一方で国内景気の問題もあって、本当に財政再建、赤字国債脱却が出来るかですね。それをまた鈴木総理は国会で出来るかと約束し、出来なければ政治責任をとるといいましたね。でもこれは、自民党内の多くも野党も五十九年まで総理かどうかともわからない。あれは十一月の総裁選に向けて、引き続きやるという意志表示と受け止めています。それよりも、よくそこまでいったと思うのは、五十九年度まで大型新税を導入し

ないと公約したことですね。歳入欠陥はまず間違いありませんから、それでどうやろうというのか。七月には五十八年度予算編成の腹も決めないといけないし、本当にどうするのか。いまや、経済運営が政局と表裏一体の大問題になってきているんです」

——対外関係もたいへんですね

「そうです。ことに六月は外交の月で、ベルサイユではサミット、ニューヨークでは国連軍縮特別総会があり、ともに総理が出席します。前後して日米首脳会談もある。対外問題は集約すると、通商摩擦と防衛問題になると思いますね。通商摩擦は対米貿易で日本の黒字が大幅に減り、向こうでは相互主義の大合唱が起っています。ECも似たようなものですね。そこで政府は非関税障壁についていろいろとやっていますが、とても欧米の要求に応えるものにはならない。問題は日本の残存輸入制限で二十七品目もあること。その大部分は農産物です。しかし、これを輸入拡大・自由化するとすると、自民党が金城湯池としている農民と全面交戦になるわけで、総理はきびしい決断に迫られます。もう一つの防衛問題。アメリカは日本の防衛努力が足りないといふ具体的な数字を示して要求を突きつけていますね。五十七年度予算の防衛費はヘイグ国務長官等も評価していますが、それは防衛力増強の第一歩としてであって、継



統的な増強を求めています。したがって、ことしは日米首脳会談などで折りにふれてアメリカはこれを突きつけてくるでしょう。そのとき、国内では福祉にもメスを入れる財政再建の中で、防衛費だけ増額できるか。ここでも総理は正念場を迎えることとなりますね」

――行革もありますね

「実は昨秋の国会で、三十六本一括法案が通って、行革はべらぼうに実が上がるかと思ったら後年度へのツケ回しがあった。昨年の行革はトバ口で、こしが勝負どころなんです。七月には第二臨調の基本答申が出ますが、相当きびしいものになると思います。その眼目になるのは国鉄でしょう。国鉄の五十七年度予算は、赤字一兆三千八百億円、国の助成金は七千三百億円で計二兆一千億円を超えま

す。これは政府が財政再建で向こう三年間毎年減額する赤字国債一兆八千億円よりも多いわけで、この国鉄を放置できない。どんな答申が出るにせよ、鈴木総理が土光答申をどう受け止め、実行するか、たいへんな選択になります。国鉄については、国労・動労のストライキも考えとかなないといいませんか」

――ロッキード事件はどうでしょう

「ロッキード裁判はこれまで、すべて有罪判決でした。問題は田中元総理への判決で、これは田中六助政調会長の一月発言が代弁していると思います。つまり、無罪を期待するがむずかしいようだ。この問題は衆議院選挙とからんでいましてね、年内判決があるならその前に総選挙をやらう、大義名分として行革断行があるというわけです。しかし、年内判決は無理になってきたようですね」

――十一月の自民党総裁選は

「鈴木総理は昨年十一月の改造人事で再選の足固めをしたと思います。同時に党則改正で、立候補者は国会議員五十名以上の推せんがいることになり、立候補者が三人未満のときは予備選挙をしないことになったので、四人以上立つのはむずかしく予備選挙はない見通しが強まっています。しかし、政治は一寸先きは闇といますから、総理が国会運営を誤ったり日米関係や行革などで躓く場面が起ったりすると、どうなるかわかりません。現に二年も総理をやればいいじゃないかという声も党内にあります。そうなると

福田元総理ではないが、天下大乱になりかねません」

――野党の動きはどうでしょう

「社会党の左バネが強くなり片肺執行部となったことが、今後の野党の動きに大きく影響しそうです。とくに公明党との間がギクシャクし、国会運営や選挙協力で相当スキ間風が吹くでしょう。また、社会党右派もこのままではない。もう一つは、公明・民社・新自・社民連の中道政党による院内統一会派で、これはやはり中道新党をめざす前段なんです。しかし、民社や新自の中で公明党・創価学会に対する強い拒否反応もあり、いち頓挫して合同国会対策協議会へと後退した。ところが、中道の政党主脳の中には、いまのように強く統一された自民党は保守合同以来二十七年間の中でも例外なんだ。自民反主流派六十九人が大平内閣不信任案採決の衆議院本会議で欠席したのは二年前のことではないか。ことは歳入欠陥、行革等々、自民党内でもガタガタする。そして混乱が起きたら、いつでも乗じて、こんどこそ保守中道勢力の結集をはかるといっています。まだ、ロッキードもあるし、これから政局は本当に波乱万丈で、それが五十七年の政治だと思いますね」

――ありがとうございました。

〈二月八日談〉

教師としての日本

変わるアジアの対日観

齋藤志郎

日本経済新聞社アジア総局長(在シンガポール)／茅誠司部会

一九四一年十二月の真珠湾攻撃、マレー作戦による太平洋戦争勃発から今日までの四十年間は、日本とアジア・太平洋諸国との関係を、侵略者とその被害者の関係から、友好国そして対等のパートナーの関係に変えるのに十分な年月であった。今日、アジア・太平洋地域で日本を「敵」と見做す国は一つもなく、軍事的あるいは経済的にも日本を「脅威」と感じている国はない。この地域に対するソ連の軍事的脅威が高まる一方、中国の潜在的脅威を感じる国はあっても、近い将来、日本が再び軍事的脅威をこの地域に及ぼすとは見えない。皆無とはいわぬまでも、ほとんどない。一時期、日本の経済支配に対する懸念が高まって、反日ないし対

日批判の声があがったことはあった。が、いまでは東南アジア諸国の指導者の間で、日本との経済関係をさらに強化するだけでなく、日本を一つのモデルとして、その経済社会建設のため日本から学ぼうとする機運が高まっているのは、すでに周知の事実である。「日本に学ぼう」という意識は、かつてはあったかもしれない劣等感ないし反目感を払拭して、日本と対等たり得る国民的資格の自覚と誇りに、裏付けられたものと見るべきである。問題は、「教師としての日本」の役割りを果たす構えが日本の側にあるのかどうか、ということであろう。

リー・クアンユーの「日本学習」

過去四十年の間に、日本との係わり合いで最も劇的な変化を遂げたのは、シンガポールである。ラフルズ以来、大英帝国の戦略拠点として「西の経済圏」に組み込まれていたシンガポールは、一九四二年から三年半の間、日本を盟主とする「東の経済圏」——大東亜共栄圏の一つの歯車として利用され、苦渋に満ちた経済社会の激変を経験した。昭南島時代は、「軍国主義日本による経済的利益の剝奪」と政治的自由喪失の暗黒時代」として、シンガポールの歴史に記録されている。

戦後の一九六二年から六三年にかけては、戦時中の華僑大量殺害の惨虐行為がもとで、「血債追討」問題として反日感情が噴出した。

そのシンガポールは今日、貿易、工業技術導入、建築、商業流通部門に至るまで、日本を最大のパートナーとする国となったのである。

しかも、自然にそうなったのではなく、貿易立国、輸出志向の「日本モデル」を追求するリー・クアンユー政権の明確な国策が成功を収めた結果、こうなったの

である。そして現時点では、日本モデルの追求は単なる経済的、物質的側面よりも、日本の経済社会を支える労働、経営倫理、道徳、作法を学ぶ精神的、形而上の側面にまで及んでいるのだ。皮肉な見方をすれば、あの暗黒時代の昭南島に、西の物質主義を排して、東の精神主義を持ち込んだ日本占領時代の「東の間の日本化」を再評価しようとしているのかも知れない。無論、強制的に押し付けられた日本システムと自主的に学ぼうとする日本システムとは、取捨選択の自由の有無からみても、同じ次元で論ずべきものではあるまい。軍国主義日本と民主主義日本とは、その価値体系もおのずから異なるはずである。にもかかわらず、リー・クアンユー首相の「日本学習運動」は西欧的個人主義を日本的集団主義に置き換え、「チームワークの精神」を社会組織の魔法の杖とし、儒教の「忠、孝、仁、愛……」という道徳価値の導入によって、国家社会の安定的発展を期そうとするものだ。この点からみれば、シンガポールが移植しようとするのは、戦時、戦前はおろか、明治、徳川期にまで遡る伝統的な日本的、東洋的価値体系なのである。シンガポールの成功の過去と現在、そして将来も、日本と切り離しては考えられないようである。

「東を向く」マハティール

シンガポールの「日本学習熱」はマレー半島にも飛び火している。飛び火というよりも、かねてひそかに日本志向を強めていたマハティール首相が政権の座について、シンガポールには一味違った「日本に学べ」運動が表面化してきたものとも見るべきだろう。

リー首相の場合は、それが精神的な啓蒙運動にまで高まったとしても、あくまで現実主義、実利主義の計算に基づくものであるのに比べ、マハティール首相の場合はかなり心情的に、日本に傾倒しているように思われる。その証拠には、首相の愛嬢のフィアンセのカナダ留学志望を断念させ、日本留学を決め、息子にも日本留学をすすめている、というのである。

マハティール首相はリー首相と違って英国留学の経験はなく、したがって、かつて華かなりし大英帝国への郷愁はひとかけらもない。そして、マレーシア歴代首相の中で初めての「土着宰相」として、ブミブトラ（先住民）政策の障害となっている旧英植民地体制の既得権益排除に果敢な闘いを挑むに当って、日本システムの導入は有力な代案となり得るとの政治計算が、彼の胸中に成り立っているようだ。シンガポールの日本システム導入が政策的次元の問題であるとするれば、マレーシアの場合はより高度の政治的次元の問題であるように思われる。

西を切り捨て、東を向く「マハティールの改革」を象徴的に印象付けたのは、この二月上旬、英外相カリンントン卿のクアラルンプール訪問と相前後して開かれた日本・マレーシア経済協議会での開会演説でマハティール首相は、もはや世界市場の支配力を失った西欧への依存は無意味であり、マレーシアを初めASEAN（東南アジア諸国連合）の経済的独立を達成するためには、先進国とはいいながら、いまでもデベロッピング・カントリー（発展しつつある国）である日本あるいは韓国との協力関係を一層強めなくてはなら

問われる日本人の真価

日本を教師と見て、日本人の行儀作法まで見習おうとするシンガポール、マレーシアの対日観は他のアジア・太平洋諸国にも次第に浸透してゆくであろう。ただし、それはこれら二国での「教師としての日本」が期待に応えるだけの成果をあげたうえで話である。

かつてはイギリス人が教師であったマレー地域では西欧的価値観がいまでも根強く残っている。指導者の意気込みはともかく、一般国民、知識エリート層には、日本システムの導入にひそかに反発を感じるものも少なくないだろう。シンガポールに例をとれば、リー首相の導入しよう

ないと強調した。地元有力紙ニュー・ストレーツ・タイムズの一面に掲載された政治マンガは、カリンントン卿の訪問を受けて奥座敷で待つ日本の着物を着たマハティール首相をあしらって、マレーシアの英国離れと日本志向を巧みに表現していた。当面、マハティール首相が日本式企業組織の目玉として導入をねらうのは、「マレーシア総合商社」の設立である。これによって、貿易および貿易外収支の不均衡を改善しようというわけで、マレー人商社マン養成のため、日本に見習いにし、日本からも商社マンのベテラン講師を招いて教えを求めるといふ趣向である。

とする日本方式はもととはといえば中国の儒教思想の焼き直しではないか、とみる中国語系華人は、いまさら日本を教師とあがめる必要はないと考えているかもしれない。またマレーシアを含めた英語系華人、マレー人のエリートたちは、西欧的個人主義が日本的集団主義によって圧迫されることに危惧の念を感じているかもしれない。

さりとて、教壇にあがるまえから、旗を巻いて引き揚げるわけにはいかない。日本と日本人の真価が、ものとかねの次元ではなく、まさに「ひと」の次元で、アジアで試されるときが来ている。



わが国原子力開発 の現状と課題

梶本晃章

東京電力(株)広報部広報課長

わが国原子力開発の現状

定着した原子力発電

昭和五十五年度におけるわが国原子力発電の発電量は、八二〇億KWhであった。これは、わが国電力会社の総発電電力量の二六%に当たる。わが国の電気の約六分の一が原子力発電によってまかなわれていることになる。原子力発電によるこの発電量は、石油に換算すると約三〇〇〇万Klに相当し、原子力の石油代替効果は、期待どおり大きい。

現在わが国には、一〇箇所二二基合計一、五五二万KWの商業用原子力発電所が稼動している。わが国の原子力発電の主力となっている軽水炉の第一号として日本原子力発電(株)敦賀発電所(沸とう水型三五・七万KW)が営業運転を開始したのは、十二年前の昭和四十五年の三月であった。この十二年の間に二回の石油危機があり、世界のエネルギー情勢は一変した。石油代替エネルギーの大宗としての原子力発電は、こうした中でこそその役割を十二分に発揮することを期待された。しかし、今日に至った原子力発電がたどってきた道程は、決して容易なものではなかった。昭和四十六年の非常用炉心冷却装置(E.L.L.S.)をめぐる欠陥原子炉問題、五十四年のスリー・マイル

島原子炉での事故など米国で生じた事件

が波及、影響した事態や沸とう水型炉に

生じた応力腐食によるパイプなどの微細

なひび割れ問題、加圧水型炉に生じた蒸

気発生器細管の減肉現象問題等、わが国

の原子力開発は、幾つかの難問を乗り越

えてきた。上図は、わが国原子力発電所

の稼動率(設備利用率)を示したものだ

が、ちょうど第一次石油危機の前後から

五年間程が「苦しみの時代」であったこ

とが良くわかる。前述の問題に対しては、

原子炉ユーザーの電力会社と、メーカー

の技術陣の努力によってそれぞれ解決策

が見出され、対策が講じられてきている。

その結果、稼動率も次第に向上しつつあ

り、五十五年度は、六〇・八%となつて

いる。五十六年度は若干ながらさらに向

上し、六一・六二%となると見込まれる。

わが国の原子力発電は、次第に安定した

エネルギー源として定着してきていると

言える。

前述の苦しみの中から、米国から導入

した現在の原子力発電技術について、わ

が国独自の改良をはかろうという計画も

進んできている。昭和五十年から始まっ

た国、電力、メーカーの三者共同による

改良・標準化計画がそれであり、二年後

には、改良・標準化第一号炉が営業運転

を開始する予定になっている。そのほか、電力会社のイニシアチブにより、欧米の原子炉メーカー等とさらにつつまんだ改良を検討する試みも始められており、わが国軽水炉の定着化は、一段と進められつつある。

原子力発電の開発計画

原子力発電所を建てるには五年の建設期間が必要である。政府の電源開発調整審議会での決定からだと、運転開始まで七、八年を要する。さらに土地の買収や事前の諸調査の段階から数えると一〇年から一五年の長期に及ぶ。原子力発電所開発計画の難しきである。現在、わが国には、前述の運転中原子力発電所に加え、一七基合計一、六二二万KWの建設中ならびに建設準備中(電調審決定後のもの)の原子炉がある。このうち一三基一、一三七万KWが六十年代末までに営業運転の開始を予定している。

昨年は、東京電力の柏崎・刈羽原子力二号、五号、中国電力の島根二号、東北電力の巻一号の四基が電調審を通った。

(原子力発電所が電調審で決定をみたのは、五十三年十二月以来二年四月振りのことであった)。北海道電力の共和・

泊原子力の第一次公開ヒアリングも行わ

れた。昨年末には、中部電力浜岡三号が、

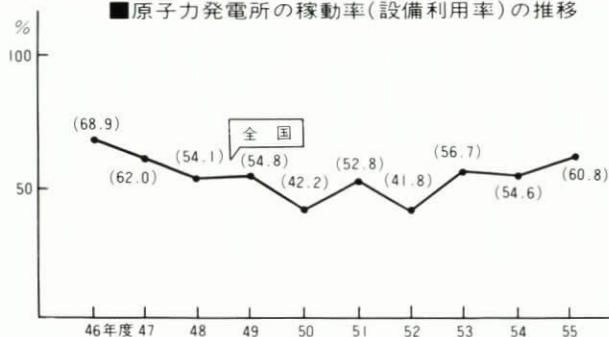
そして今年に入り日本原電の敦賀二号が、

安全審査を終わり、原子炉設置許可が下

りた。ちょうど三年前の五十四年三月の

米国スリー・マイル島原子力発電所の事

■原子力発電所の稼働率(設備利用率)の推移



故以来動きを止めていたわが国の原子力開発は、昨年から再び着実に進展を見せはじめています。原子力発電所の建設には、前述のように極めて長い年月を要するだけに、六〇年代、そして七〇年代のエネルギーの安定確保のため、この着実な動きを何とか進めてゆかねばならない。また、原子力発電は、経済性の点でも石油や石炭を使う火力発電に比べ優位にある。それだけに、原子力開発の着実な進展は、将来のわが国エネルギー価格の上昇を抑制するためにも必要なことである。(ち

原子力開発・今後の課題

課題の第一は安全確保

原子力開発今後の課題の第一は、何といても安全性の確保である。原子力発電所とその関係する核燃料関係施設の安全性を確保することは、わが国原子力開発推進の大前提であり、それを現実示してゆくことが原子力開発についての国民の広範な支持を得るうえでも欠かせないことである。この安全確保の課題と常に並んで課題であるのが、原子力についての国民各層の方々の理解、支持、すなわちパブリック・アクセプタンス問題である。

前述の軽水炉定着化による原子力発電所の信頼度向上も今後の重要な課題の一つだが、特に今年、わが国原子力開発の当初から重要課題の一つであった核燃料

なみに標準的な発電所についての試算によると昭和六十年に運転を開始する発電所の場合、1KWh当たりの発電単価は、原子力・一四・一五円、石油火力・二五・二六円、石炭火力・一九・二〇円、LNG火力・二二・二三円、と見込まれており、原子力の発電単価は安い。加えて原子力発電の発電コストは、石油、石炭、LNGなどと違い、燃料費の割合がおよそ二・五割と小さく、それだけ安定的だと言える。

サイクル確立の具体的実践の年だと言える。

課題の第二は再処理施設

昨年の秋、わが国では初めて核燃料サイクルが全く実験的な小規模ながら完全にひとまわりした。わが国の原子力発電所の原子炉で使用された使用済みの核燃料を、茨城県東海にある動燃事業団の再処理工場で処理してプルトニウムを抽出し、それをまた燃料に加工して、新型転換炉の原型炉「ふげん」に入れたのである。原子炉で一度使った核燃料を再び処理し、再度利用のできるウランとプルトニウムを抽出してもう一度使う。この核燃料サイクルは、ウラン資源のほとんどないわが国にとって、エネルギー安定確保のうえからも、燃料経済を将来享受す

るうえからも重要な課題であり、原子力開発の初期から取り組んでいるところである。

わが国の発電用原子炉で使用された核燃料は、現在、そのほとんど大部分を英・仏両国の再処理工場に委託して再処理してもらっている。しかし、核燃料サイクルを国内で完結させるには、まず、再処理工場の実用規模のものを建設しなければならぬ。そこで、二年前の五十五年、再処理事業を民営で進めるため電力業界を中心に広範な業界の出資により、日本原燃サービス株式会社が設立された。この原燃サービス(株)では、年間処理量一、二〇〇トンの本格的再処理工場を六十年代中頃に完成することを目的に立地の選定、設計研究等の諸準備を進めている。この工場の規模は、六十年代中頃のわが国再処理需要をほぼ全量まかなうことができるだけのものである。再処理工場建設には、原子力発電所以上に時間を要すると考えられ、六十年代中頃完成のためには、今年中にも立地決定をはじめ主要な第一歩を進めることが必要となっている。

この他核燃料サイクル確立の重要な課題としては軽水炉でのプルトニウム利用技術の確立、ウラン濃縮事業の確立、高レベル放射性廃棄物の処理処分問題等があるが、いづれ今年中か、ここ一二年内には具体的進展が見られる状況になっている。わが国原子力開発は、新たな発展段階を迎えつつあると言える。

中国のエネルギー事情

日本エネルギー経済研究所 ● 研究企画室長大場英男

昨年十二月十二日から十二月二十四日までの十三日間にわたり、当研究所の生田理事長を団長とするエネルギー使節団が、中国を訪問した。

当研究所のエネルギー使節団の訪中は、一九七九年、一九八〇年に続いて三回目であり、今回の訪中の目的は、中国が特に関心を持っている省エネルギー対策、

エネルギーデータバンクの整備、エネルギー需給計画の策定等について、当研究所の知識及び経験を中国にひろく伝えると共に、中国のエネルギー事情を調査することにあつた。

当使節団は中国で熱烈な歓迎を受け、余秋里副総理と会見し、晩餐にまで招待され、「人民日報」には、訪中団の記事が掲載された。特に国家能源（エネルギー）委員会、

新設されたエネルギー研究所とは、今後の定期的交流が約束され、早速今年二月三日、五日の両日にわたり、楊波国家エネルギー委員会常務副主任を団長とする中国エネルギー代表団が、当研究所を訪れ交流した。

ここでは紙面の都合もあり、今回の訪中団が中国の各機関を訪問して見聞きしたエネルギーに関する話の一部をご紹介します。

●中国のエネルギー政策

現在の中国のエネルギー政策のポイントは、「省エネルギー」と「エネルギー開発」を並行して押し進めることである。（省エネルギーというより、むしろエネルギー消費ロスの改善といった方がふさわしい）。

特に中国の省エネルギーについては、その潜在力は大きい。例えば、鉄一トン生産するのに消費するエネルギー量は、先進国の二倍で、又一次エネルギー需要量は日本より多いのに、GNPは日本の三分の一であつたり、中国製の「上海」という車の走行距離が五km/lで日本車の二分の一である。

中国の工場の機械設備は、一九四〇～一九六〇年代の機械が大半を占め、その設備は老朽化し、新しい設備を導入することは、省エネルギーに大きく貢献するが、資金の問題があり、早急には解決できない。

しかし、それでも中国は着実に省エネルギーをすすめて、一九八一年には標準炭換算で二千四百万トン（中国の一次エネルギー需要量の約四％）の省エネルギー目標値をオーバーした。

その主因は、現在中国が行っている産業構造転換である。即ち、エネルギー消費量が多い重工業を控え、逆に軽工業を

伸すという経済調整の効果である。

また中国はエネルギー資源は豊富であるが、文化大革命の十年の間探鉱活動がおくれ、埋蔵量を増すことができなかった。そのため原油については現在の生産量（一九八〇年一・〇六億トン）の一億トンを三、四年は継続し、その間に開発に努力することになるであろう。

一方石炭については、米、ソ連に次いで世界第三位の埋蔵量を誇るが、インフラストラクチャー整備に問題があり、現在の生産量（一九八〇年六・二億トン）を急激に増すことができない。

●中国のエネルギー需要の特色

中国の一次エネルギー需要量は米国、ソ連に次いで世界で三番目に多いが、他国と異なるのは、一次エネルギー需要量に

占める石油のウエイトが非常に低く、石炭のウエイトが高いことである。

また国土が日本の二十六倍と広いうえ、

エネルギー資源分布地と消費地が離れており、エネルギー輸送に問題をかかえている。

一次エネルギー消費量の
エネルギー源別構成比

	米 国	ソ 連	中 国	世 界
石油	43	37	21	44
石炭	22%	29	71	29
水力	4%	4	4	6
原子力	4%	1	0	2
天然ガス	27%	28	3	19

出所：中国以外は一九八〇年BP統計

即ち、東の地域、例えば東北、北京、天津は経済的に発達しているが、エネルギー資源は少い。石炭の確認埋蔵量、あるいは包蔵水力量は黄河及び揚子江上流、西南、西北、山西省、内モンゴルに豊富だが、その地区の経済は発達していない。つまり、西の石炭は東へ、西の電力は東へ、北の石炭は南に輸送せねばならない。現在、全鉄道輸送量の四〇％が石炭輸送で占められている程である。

次に民生用エネルギーであるが、日本では電気の他に民生用エネルギー源は灯油、都市ガス、LPGであるが、中国は石炭、豆炭、薪、メタンガスが中心で、石炭は何とその需要量の一七％の一億トンが民生用で使用されている。灯油は殆んど中国では使用されず、日本で石油需要量の一二％を占める灯油も中国では六％にも満たず、農業用に使われている。

メタンガスは、農村部を中心に家畜の排泄物や植物をメタンガス発生槽に入れ、ガスを発生させ利用しているが、その発生槽の数は七百万以上もあり、年間二十億^m以上のバイオガスを使用している。

●石油●

現在原油は年間約一億トン生産され、そのうち千三百万トンが日本（一九八〇年八百三十万トン）を中心に輸出され、原油生ダキに千二百万トンが使用されている。

日本の場合、公害問題から止むを得ず電力会社が原油の生ダキをしているのであるが、中国が原油の生ダキをしているのは、かつて火力発電所が建設された当時、石油精製設備が足りず、重油が不足し、そのため原油生ダキをした歴史が、そのまま継続されているのだそうである。また石油製品の生産量は、ガソリン千百万トン、灯油四百万トン、軽油千八百万トン、重油三千万トンである。そううち、ガソリン、ナフサを中心に四百万トンの石油製品が米国西海岸、日本、東南アジアに向けて輸出されている。

この国の石油需要の特徴は、軽油が中心で、農業用水用ポンプ等農業に殆んどが使われている。

このため、中国の石油生産設備は、蒸留装置の能力は日本の三分の一の百八十六万B/Dしかないのに、重質油分解設備の能力は六十二万B/Dと日本以上に保有している。

●石炭●

石炭は年間六・二億トン生産されその用途は産業用六〇％、電力用一九％、民生用一七％、交通用四％である。

特に火力発電については、石油火力から石炭へ切り替えを行い、石油火力容量一千万kwのうち、二百万kwが既に切り替えを終えた。これは過去に、石炭火力が石油火力に転換したものが、再び石炭に転換したものであり、このような石油火力はこの他に二百万kwもある。

さらに中国には蒸気機関車が、七千台もあり、全輸送の八〇％を占め、このSLが年間二千五百万トン（現在の日本の一般消費量にほぼ匹敵）も使っている。

●電力●

発電設備容量は六千万kwで、水力千六百万kw、石油火力八百万kw、石炭火力三千六百万kwでその他に農村における小型発電設備が五百〜六百万kwある。

この設備容量は、日本の二分の一であり十億の人口をかかえる中国では、電力の供給は不足気味である。

原子力発電所は、現在未だないが、将来沿岸地域、東北地域等エネルギー資源の少ない地域で建設の計画はしているが、遠い将来の話となるであろう。

パニックは起こるか？

政策科学研究所

はじめに

「判定会招集情報」という言葉をご存知ですか？ あまり聞きなれない言葉だと思います。もちろん、東海地震についての「地震災害警戒宣言」という言葉は聞いたことがあると思います。

警戒宣言は、大規模地震対策特別措置法に基づき、内閣総理大臣が発令するものです。判定会も同法に基づき、それ以前、約二〜三時間前に気象庁長官の要請により、判定会会長がその開催を決め、招集します。「判定会招集情報」とは、その招集についての情報で、招集を決めた後、約三〇分後に、在京の報道機関を通して発表され、各家庭のテレビやラジオを通して、皆様の目や耳に入る地震に関する第一報と考えるとよいわけです。したがって、警戒宣言は、判定会の結果、「クロ」であれば発令され、「シロ」であれば発令されません。

では、なぜ、このような判定会招集情報が地震パニックと結びつくのでしょうか。地震などの災害によるパニックは、発災直後の急性的なパニックと発災後長期に渡るパニックが考えられます。都市機能（たとえば、電気、都市ガス、上下水道、そして公共交通機関等）の依存度の高い都市住民にとっては、特に、発災後のパニックは重大な影響を持つと考えられています。

しかし、今日は情報化社会といわれています。（速さと量だけで正確さに乏しいことも多い）。「東海地方で、何かキナクさい」という噂は、尾ヒレをつけて、猛烈な勢いで流れるでしょう。また、判定会の招集される」という情報がリークされたり、デマとして話されることもあるでしょう。判定会招集＝警戒宣言と人にもいるでしょう。これらのことにより、発災以前のパニックも要注意となるわけです。このパニックの潜在性について今回調査しました。

判定会招集情報では

判定会招集は、地震防災対策強化地域の間などを通して防災関係諸機関に防災体制準備のために直ちに伝わります。その他の事業所や一般の人々へは、前述した「判定会招集情報」として発表されますが、職場や家庭での防災上重要な時間は、これから始まるのです。

ところが、調査結果によりますと、判定会招集情報の正しい知識を持っていた人は約一〇%、つまり、静岡県民においてすら一〇人にたった一人です。強化地域外の東京都民や千葉・埼玉県民に至ってはこれより少ないことでしょう。

その他の人々がどう判断したかまでは聞きませんが、仮に、判定会招集＝警戒宣言と考え、行動に移る可能性もあります。これらの不確かな判断に基づ

いた口コミによる情報は何を生みだすことになるのでしょうか。それは、パニックでしょう。

これを裏付けるようなことは、伊豆大島近海地震（昭和五三年）の静岡県の「地震情報」がありました。また、昨年一〇月の平塚市の警戒宣言誤報において、岡部東大新聞研教授らの調べによると、誤報を聞いた半数近くの人々は半信半疑であったといえます。これら半信半疑の人々からの情報は正確には伝わらないでしょう。

次に、調査では判定会招集情報とは何かを説明した後に、この公表後の対応について聞いてみました。その結果は、テレビやラジオで情報を確認し、非常用持出品の準備や着替え、そして、家屋の防災など身の回りで手のつけられる対応というパターンになり、非常に常識的な回答になりました。このデータだけを見る限りにおいては、比較的安心な材料と言えましょう。しかし、数は少なくなりませんが、家族に連絡をする人、避難する人など情報公表後外へ出ると言う行動を選択する人々が三割程度いると考えられます。とくに、この段階、つまり「シロ」とも「クロ」とも判定されていない時点で避難すると言う人が約一五%にも達していることは注目すべきことで、一回位の説明では理解出来ないことを示しています。

また、常識的な回答をした人々も、その常識的な行動をとるといって保証がない

どころか、次に述べるような結果もあるのです。

警戒宣言

では

警戒宣言とは、判定が「クロ」となった時発令されるものです。この発令により、地震防災対策強化地域に指定されている一七〇市町村では、住民に知らせるサイレン、鐘が鳴らされます。広報無線も広報車も活動を始めるでしょう。

表に示したものは、このような警戒宣言が発令された時の行動を、仮定として聞いたものと、平塚市の誤報の例を比較するために載せたものです。平塚市の誤報は夜九時であったため、火を使っていなかったり、子供を迎えに行く必要がないので、これらの項目は除くとして、顕著な差は電話による問い合わせに出ています。昭和五四年の東大新聞研究所のデータでは一〇%となっていますが、昭和五六年の当研究所の調査と他のある調査では、二・三%と減っています。つまりこの二年間で、電話で問い合わせられない、問い合わせても通じないということが、周知して来ていることによると思います。

しかし、平塚市の東大新聞研のデータでは一九%の人々が電話で問い合わせをしています。これは、パニックを生む根源的な心理状況を明らかにしているのではないのでしょうか。建て前としては、「電

話はかけない」ということであっても、いざという時は、すぐに電話に飛びつくことを示しています。

前述しましたように、判定会招集情報公表時でも、同じことになるのではないのでしょうか。調査では、判定会招集情報で「知らせた」上での結果が何であるかを「知らせた」上での結果です。それでも、外への行動に移る人が多いのです。知らない人、判定会招集情報に警戒宣言とつた人、そして心理的な慌てから、アンケート結果の三割程度ではすまなくなるのではないのでしょうか。このような人や情報のトリップの増大は、防災関係機関にとって非常にやっかいな問題です。防災のために配置に付くことを、混乱状態の中で行う必要が生じるわけです。そして、二時間後にでも警戒宣言が発令されたら……。

東京の新宿などの都市機能を持ち、昼間人口が集中する地域の駅などは、收拾がつかなくなるでしょう。また、せっか

く考え出した時差退社も、その時差が同一であったらだいなしでしょう。

「判定会招集情報」でも「警戒宣言」でも建て前論と本音の差が大きい現実をみれば、パニックが生じないということほとんど考えられないのではないのでしょうか。

パニックの公算大

いままで述べて来ましたが、発災前にパニックの生じる可能性は大きいと言えます。パニックの拡大していく過程に発災でもしたら取り返しのつかないこととなります。

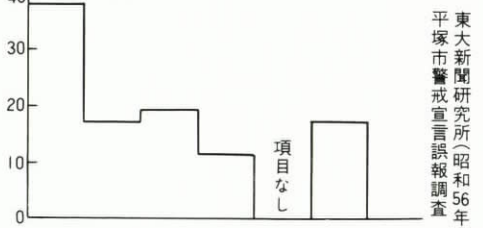
その未然防止のためにも、「判定会招集情報」と「警戒宣言」が何を意味しており、実際にどのような内容を発表していかをラジオ、テレビ等を通して理解することが必要なわけです。しかし、こ

のような行動を取り得るためには、日頃からの心構えが必要となります。建て前にもです。アンケート結果内容を詳しく見て行くと、日頃から防災訓練を行っている地域の人々は、行動面で少々異って来ます。たとえば、新たな買出しや非常用品の確保などが不必要となっています。

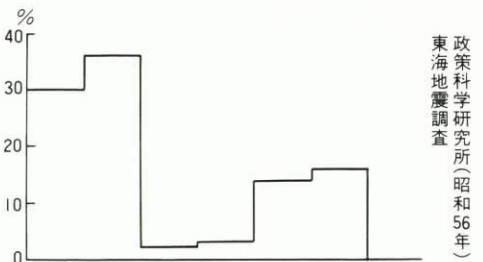
また、東京三多摩地域での平日夕刻七〜八時に家族全員の常にそろおうという家庭が約二七%というアンケート結果もありますので、状況によっても異なるでしょう。平素から防災について心がけ、建て前としておくのではなく、本音として行動できるようにしておくことが、防災関係機関の活動も行ない易くし、かつ、自己の安全を確保することとなるのではないのでしょうか。

(伊藤 勝)

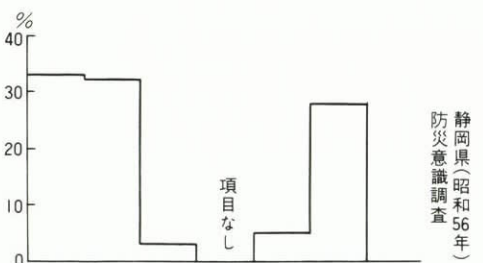
警戒宣言が発令されたら、お宅ではどうする？



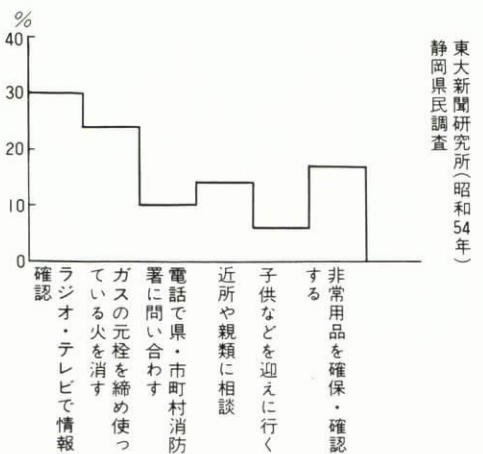
東大新聞研究所(昭和56年) 平塚市警戒宣言誤報調査



政策科学研究所(昭和56年) 東海地震調査



静岡県(昭和56年) 防災意識調査



東大新聞研究所(昭和54年) 静岡県民調査

〔注〕複数回答やその他の項目で調査により差がありますので、比較しやすいように左記6項目で100%になるよう計算し直しました。

七度目の成年

茅 誠司さん

東京大学名誉教授・日本学士院会員／茅誠司部会

に行き更に南西航空で石垣島に飛び三時半頃到着、一台のバスを借り切ってカピラ湾、自然椰子園と島を一周して、飛行場と海岸に近いホテル、サンコーストに泊る。居室は広いキャンパスの中に散在していて大変に気分がよかった。

翌三十一日は早朝船に乗って西表島の船浦に向う。最初はよかったが途中は大変な揺れ方で大部分は船酔いにすっかり参ってしまった。面白いことに一番強そうな次男がひどく酔い、老人の私などは何でもなかった。この西表島の名物は西表山猫であるが、その数は限られている上に夜行性なので見ることはできなかった。しかし日本ではその島でなくては見られぬマングローブの見事な景観を雨中雨合羽の中から楽しんだ。

正月元旦はこのホテルサンコーストで迎えたが、直に飛行機で那覇に向い、午

後を南部戦跡と沖縄平和記念堂と珊瑚博物館で過した。平和記念堂にはパワーで有名な西村計雄画伯の三〇〇号の絵が、目下八枚(十八枚で完成)掲げられているが、私は対島丸の画の前で暗涙に唄んだ。無心の子供達にもこの画の中の光景を説明したいとさえ思った。

この夜は沖縄中部のホテルムーンビーチに泊った。折しも三日月が白波のよせる海辺に浮んでいた。このホテルは日本内地には見られぬ豪華なもので、十八名吃驚してしまった。翌二日は海洋博跡の水族館の豪華さと西南植物園の多彩な植物を楽しみ、又昼食は名護の海近くにある食堂で「ソウキそば」を味わった。そして翌一月三日午後東京に全員戻ってきた。一生に一度の楽しい子供や孫達との旅を楽しむことができて幸いであった。



昨年十二月二十一日で私は満八十三歳になった。今年は私の七度目の成年である。そこで息子や娘と孫達が揃って十八名で、お祖父さんの沖縄協会会長をしている間に、年度末から年の始めにかけて沖縄旅行をしようという事になった。費用は総てお祖父さん持ちという条件であることは申すまでもない。

この時期は飛行機もホテルも非常に混雑しているので、計画を立ててくれた沖縄協会の持丸さんは大変な苦心であったらしい。

十二月三十日に羽田を朝出発して那覇

技術者の不感症

林 雄二郎さん

(財)未来工学研究所副理事長／大来佐武郎部会

昨秋、東南アジアの国々をまわって痛感したのだが、食文化という点では明らかに日本の方が劣っている。特に辺鄙な田舎を旅してそう思う。名もなき「めし

や」でびっくりするほど安い値段で、びっくりするほどおいしいものを食べさせてくれる。考えてみると、日本はもともと食文化の高い国だった筈なのに一体どうしたことだろう。私はその第一の原因は、いわゆる工業化にあると思う。特に最近のインスタント食品の氾濫はひどい。何もかもみんな同じ味になってしまう。それから養殖の魚、そして鶏でも豚でも人工的な飼料で大量に育てられる——つま

りはこれも一種の工業化だが、その結果、これも味の画一化につながる。こういつて嘆いてみせたら、タイ国のさる大学の先生が「いやわが国でも、やがて同じことになりましたよ」となぐさめてくられた。「何故ならあなたのいう工業化がわが国でもはじまっていますからね。そしてその方面では日本の指導が大いに寄与してるそうです」とつけたしてくれた。ほめられているのかくさされているのか、



パイロットなみの滞空時間

大来佐武郎さん

内外政策研究会会長・(社)日本経済研究センター理事・顧問／大来佐武郎部会

いささか奇妙な感じになったものだが、とにかく私は工業化ということについて深く考えさせられた。工業化はたしかに経済的な豊かさをもたらす。そしてそれは当然食生活にも影響する。それが結果的には私のいう食文化の退化をもたらすことになる。これは果して幸福なことな

のだろうか考えると、何かしら一種の空しさというか、寒さのようなものを感じずにはいられなかった。ところで、私がつと頭を抱えてしまったことは、日本で、この話を或る技術屋さんたちの集まりで話した時の、技術屋さん達の無感動ぶりであった。賛成する

ロットよりも長いかもしれない。

でもなし、反論するのでもなし、要するに全くの無感動、無表情！ 私は技術者たちのこの種の社会的不感症にしばしば遭遇するのであるが、これはまことにおそろしいことだと思う。

昨年十二月四日に対外経済関係担当政府代表を免ずるといふ発令があつて、一九七九年十一月九日第二次大平内閣の外務大臣に就任して以来、二年一ヶ月――

計七百五十二日の公職を終えてようやく民間人の立場に戻つた。なんとなくひとつ荷をおろしたような気持ちである。おかげで昨年の暮れから正月にかけてゆっくり休みを楽しむこともできた。

日米、日欧貿易摩擦の強まる中で申し訳のない次第であるが、やはりこのへんで、一つの区切りが必要だという気持ちであった。外国出張は一昨年が十六回(百八日)、昨年が十四回(九十八日)滞空時間は年平均五百時間で、経験の浅いパイ

ロットより長いかもしれない。一昨年七月、外務大臣を辞めたさい、経団連の稲山会長より薦められて大来事務所を開設することになり、昨年三月富国生命ビル十三階に一室を設け、内外政策研究会の会長ということでも事務所を設けた。政府代表は建て前上非常勤であるから、事務所を持つことも差支えないわけであつたが、実質的には外務省の中の政府代表室に、常勤することになつていた。しかし事務所がすでに出来ていたおかげで、政府代表を辞めてすぐ移る先があつたことは好都合であつた。

一昨年の秋に、当時の環境庁の鯨岡長官に頼まれて地球的規模の環境問題に関する懇談会の座長をつとめ、その年の暮れには中間報告を発表し、昨年春にはOECDのパネル討論に大来報告を発表した。たまたま風邪ひきのため出席出来なかつたが金子次官が代読した。このようなきつかけて環境庁顧問になり、さらに中央公害対策審議会の委員に発令された。

古巣の企画庁でも経済審議会の委員、長期展望委員会の委員長、企画庁参与などに発令された。科学技術庁顧問、資源調査会委員などの肩書きも復活した。日本経済研究センターは、長らく理事長と会長を務めたが、いまは理事、顧問で、国際開発センターについても同様である。二十一世紀フォーラムでも中山伊知郎先生の死去にともなつて部会を引き受けることになり、日産の新しい車種の車名選考委員会の委員長まで頼まれることになつた。日米賢人会が昨年九月終了したあとをうけて、そのメンバーの牛場・佐伯・盛田・山下の四賢人のほかに、細見卓氏と私に加わつて、国際問題についての総理の朝食会も始まつた。

目下のところ、私の本職はさしあたり顧問業というところだろうか。幸い健康でもあるので、相変わらず空を飛ぶ国際エコノミストということになりそうである。



私の近況

FORUM'S FORUM

第11回 加藤芳郎部会

昭和56年11月26日



が私たちを幸福にするか、破滅させるか。それは、これからの私たちにとって、最も重要な問題であり、考えていかなければならないということで会は終わった。

なお、今回の出席者は、加藤芳郎、大

第7回 大来佐武郎部会

昭和56年12月10日



構造の歴史的变化に対応した地域の住民組織について報告をした。

加茂は、商港として最初栄え、後に漁港に転換し、今日では漁業のマチとして位置づけられている。近年の加茂は、鶴

山のぶ代、砂川啓介、坪内ミキ子、富田純孝、(敬称略)でした。

岡市への合併、そして行政と住民との関わりをなかで激しく変化している。戦前における商港から漁港への転換に対応した住民の動向と住民の組織、戦中の住民組織、そして戦後の町村合併、公民館のコミュニティ・センター化に対応した住民の動向と住民組織などを報告した。

なお、今回の出席者は、加藤秀俊、佐々木高明、宮田登、宮本千晴、(敬称略)でした。

化に対応できない。

ところで、行政の改革のみが力説されるのではなく、政治の改革もまた行なわれなくてはなるまい。政治家が行政に対して攻撃するだけではなく、自らの襟を正すことに積極的に取り組んだらどうであろう。ということで、今回は、「国際化時代による行政問題」と題して、(財)国際開発センター理事長の河合三良氏に話をしてもらった。今回は、出席者全員から、それぞれの立場で、行政改革から見て、国際問題に対する注目を聞くという方向で会が進められた。

なお、今回の出席者は、大来佐武郎、北原秀雄、木田宏、小林陽太郎、中根千枝、松山幸雄、ロベール・J・パロン、(敬称略)、以上の方々でした。

加藤秀俊調査報告部会

昭和57年1月12日



この部会では、毎回地元の研究者を迎えて、その土地の将来について報告をしてもらっている。今回の報告者は、山形大学助教授・舛田忠雄氏である。氏は、共同研究としてすすめられた特定研究『地方の複雑』をめぐる政治的・経済的・社会的・文化的諸問題についての総合的研究——山形県に関する歴史的分析と現状分析を中心に——の研究報告の一部から、「地域構造の変容と住民組織——鶴岡市加茂の事例——」をもとに、産業

わずか五ミリのLSI(大規模集積回路)がもたらす技術革新の波が、私たちの社会の姿を一変させようとしている。マイコン、OA(オフィス・オートメーション)、ロボット、いま工場やオフィスをはじめ、日常生活すべてがコンピュータなしではすまされなくなった。この新しい時代に、これからどう付き合ったらよいか。ということで、今回は、東京電気大学助教授・安田寿明氏を迎えて、「コンピュータと社会」と題して、会を進めた。

コンピュータがもたらす社会的経済的影響は、①オートメーション(人間の知的労働への代替)、②知的創造(人間の知的労働の増幅)、③システム革新(新しい社会・経済システムの出現)、の三つの側面としてとらえることができる。これら

最近、改めてまた、行政改革が云々されるようになってきている。行政改革は、当然、現実に見合った政府のあり方を実現するものでなければならぬ。従来の仕組みを前提としたものであっては、変

気になること

ロベール・J・バロン

上智大学比較文化学科教授／大来佐武郎部会

日本のこと、例えば日本の経済・ビジネスに関して、英語で説明することは、容易なことではない。あまり馴染のない外国語でよりは英語の方が誤解が少ないのではないかと、言い難い。英語を世

界語、あるいは共通語と仮定して話し合うことに、時折、問題をこじらせてしまう危険性がある。発音の違いをいつているのではない。(映画、マイ・フェア・デュー)の中で、イギリスの教授がいつつる「Americans have spoken English for years!」。世界中でいろいろなまりの英語が話されている。日本では日本なまりで。しかしそれは問題ではない。問題は、それによって何を伝達しようとしているかである。主語はある一定の状況・経験をふまえて、生れている。英語(フランス語、ドイツ語等)は、西洋の経験に基づいている。最良の辞書でさえも、ある英語の単語で、日本のある事柄を十分に伝達しようとは思えない。英語を母国語とする人と、そうでない人との話し合いは、まだいい方で、双方に英語は外国語である人々が、英語で会話し相手を理解しようと、あるいは、し合えたと思っている。

ビジネス英語を例にとってみる。management (マネジメント)、enterprise (企業)、decision making (意思決定)

といった言葉がよく使われる。これらは、表面上の意味を伝えるだけでなく、往々にして、中味は、明確なイデオロギーで味付けされているものである。日本の特殊な政財界の結びつきを英語で説明するやうに、government-business relations という表現がでてる。欧米人がこの英語を耳にして、まず思い浮べることは、ガバメントとビジネスという全く別個の実体があり、それも「壁」をはさんで両側に離れた二つの実体である。このような見方が欧米における基準(The standard)である。ところが日本では、この両者の間には、「壁」がない。この前提が分っていないと、両者の関係を説明されても、戸惑うのである。この日本の見方は、西洋の基準からはずれた亜流(subculture)とみなされるが、しかし、これも、もう一つの正統な基準であるともいえる。物事の判断の基準を異にしつつ、産業は、西洋では、民間の頭脳の産物であるが、日本では、政府が率先して興したものであるとか、派閥があるとか、天下りがあるとか、説明を重ねても、問題の解決に

はならない。これは、コミュニケーションの断絶でなく、二つの異った波長のうに、あるいは、平行線のように、コミュニケーションの欠如といえる。同じ意味だと思っていたものが、一方がアダプ・スマスに基づいたものであり、もう一方が、儒教に基づいたものであるかも知れない。

最近、「Learn from Japan (日本に学ぶう)」という声がよく聞かれる。ただの流行語に終わってほしくないが、自分の正統性に固執し、他を亜流とみなしていたのでは、他から学べるものではない。自分の進んでいる川が本流であって、他は支流だ、支流だと思っていたものが、もう一つの本流であることもある。そして、ポットがのみこまれる危険性もある。

最近の日本と欧米間との摩擦が、表面上は経済面だけに見えても、それはもっと深い所で起っているという危惧があるだけに、日欧の接点にある私は、気になるのである。

(訳 浜端)

目下の大問題

松原秀一

慶応義塾大学文学部教授／国際交流研究部会

中世文学の作品と云えるかどうか解りませんが、エクゼンブラと云われる説話集があります。キリスト教の司祭が説教に使えるような物語の梗概を集めたもので、ラテン語や中世ヨーロッパ語（主にフランス語）で書かれたものです。これを見ていると、毎日曜の説教の種に苦労している中世の僧侶の顔が見えるような気がして来て同情を誘われます。今でも町の本屋に行くと、実用書の棚に職場の訓話用や結婚式の祝辞用に話の種を集めた本が、意外に多く並んでいるのを見かけます。洋の東西、古今を問わず、人前で話をするのは大変なのでしょう。これらの本をまともに書評したり、研究の対象にするのですから、考えようによっては私の仕事には、いささか滑稽な所がある訳でしょう。

キリスト教の中世の説話集には、各国の土俗の民話や伝説が流れ込んでいる訳

ですが、一神教としての教義には旨く適合しないものもある訳で、どこを削ってキリスト教風に仕立てるかには聖職者の腕の見せ所だったのではないかと云うのが、目下気になっている所です。十三世紀に聖母マリアの奇蹟談が韻文でまず多く書かれますが、その六十種を書いたゴーテイエ・ド・コワンシは、マリア譚を正統派の神学に適合するように書いています。所が、その後、奇蹟物語は変質して行くようでキリスト教と云うより聖マリア教ではないかと云いたくなる程、マリアが強調されて行くようです。聖者伝が中世に流行するのにも、同じような傾向が見られ、一神教が意外にヨーロッパに馴染まなかったと見ることが出来るのではないかとも思えます。云い直せば、マリア、聖者たちは、キリスト教がヨーロッパ化する時に必要であった仕立て直しの道具であったのではないかと云うことで、正

統派の信者の方々からはお叱りを受けそうな考案です。これを立証するには膨大な量のマリア譚、聖者伝を調べねばならず、いささか閉口している所です。一神教としてはイスラムの方が厳格な所があり、アラブ的思考とキリスト教世界との対立も、このキリスト教の西欧化と深く関わるように思えます。キリスト教ともイスラムとも異なる考え方を持つ日本人は、この点を自由に眺められる筈ですが、実情は、西欧研究者は、西欧の思考法に染まってしまっていて、中々、離れた立場に立ちにくく。これが目下の大問題かもしれません。以上のことを調べるにも基礎的な学問に習熟していないことを痛感させられ、日暮れて途遠しと云う感を味わっています。

加藤秀俊部会

佐々木高明さん 国立民族学博物館教授



一九二九年十一月、大阪府生れ。小学校以来京都で育つ。立命館大学文学部地理学科卒。京都大学大学院、同助手、立命館大学助教授、奈良女子大学教授。ここまでが地理学の研究と教育を業とする。一九七三年、国立民族学博物館創設準備室（室長梅棹忠夫）の次長となり、民族学と深くかかわるようになる。七四年六月国立民族学博物館設立後、同教授となり今日に至る。

いままでやった仕事でもっともまとまったものは焼畑農耕の研究。一九五六年ごろから手をつけはじめ、日本国内の主な焼畑山村を歩いたが、六〇年ごろから高度経済成長の影響をうけて、全国の焼畑が急速に衰微してい

った。そこでその最後の姿を記録に留めるつもりで書いたのが『日本の焼畑（古今書院/昭和四七）』である。それよりさき一九六三年から六四年にかけ、ネパールとインドへ調査におもむく。その諸成果をふまえて『熱帯の焼畑（古今書院/昭和四五）』を出版。その後も国内及び海外のフィールド・ワークをすすめてきたが、最近の数年间は中尾佐助さんの提唱された「照葉樹林文化論」に共鳴。その視角から日本農耕文化の起源を解明することに情熱をもやしている（『稲作以前NHKブックス/昭和四六』、『続・照葉樹林文化』中公新書/昭和五一）。

21世紀フォーラムへの参加は、加藤秀俊さ

んからのおすすりによる。加藤さんのおつき合いは、同氏がまだ京大の人文科学研究所におられた頃、ともに今西錦司先生の共同研究に参加したときから。およそ二十年近くにもなるだろうか。同じ世代だから気楽に討論できるのが何よりのたのしみだ。

最近、日本の畑作文化の問題をもう一度よく考え直そうとしている折でもあり、このフォーラムへの参加を機会に、日本の山村を歩き直してみたいと思っている。今までの研究者が見落してきたような小さな事実を一つ一つ見つめ直して、日本の村の将来を考えるようにしたいと思っている。

加藤秀俊部会

舛田忠雄さん 山形大学助教授



一九三八年六月、茨城県水戸市に生れる。東北大学教育学部教育社会学研究室、同大学院修士課程を修了後、一時帰郷して私立高校の教師を務める。一九六六年、再び東北大学に戻って助手。一九七〇年に山形大学に移り、現在にいたる。

以上が私の簡単な経歴である。教育社会学研究室内の所属学生、つまり専門課程に進学したとき、指導にあられた先生方がすべて社会学出身であり、また、当時、研究室が一体となって村落研究に取り組んでいた。私が今日まで村落研究を続けるキッカケとなったのは、こうした研究室の雰囲気によるものであったと思う。卒業論文、修士論文とも宮城県

北部の漁業の町、唐桑町をフィールドにして書いた。それ以来今日まで東北地方の村落、とくに漁村に興味をもち、歩き続けている。

村落に関心をもちはじめたころの私は、戦前の農村社会学の文献にふれるうちに、「家」や親族や同族といった問題に強くひかれていた。こうした対象をめぐる問題が、日本の村落ばかりか、日本の社会の性格を明らかにするために重要であったことは、多くの研究者によって指摘され続け、いまさらいうまでもない。が、私の場合は、私自身が長男であり、いつてみれば長男としての何かしらの重みを感じ続けてきた自分自身の問題が二重写しとなって、「家」や親族や同族の問題にひか

れた、といった方が正しいかも知れない。いずれ少し時間をおいて、とくに「家」の問題には戻っていききたいとは思っているが、今は農民や漁民の生活そのものをおして村落の変化の過程を見つめていきたいと考えている。真夏の太陽が照りつける三陸の漁村で、また激しい吹雪の日本海の漁村で、多くの村人たちに接し、そして話を聞くたびに、いっつもながら来てよかったと思う。

これからも村あるきを続けながら、何かを考えていきたいと思っている。

新メンバー紹介

FORUM'S FORUM

21世紀フォーラム/部会メンバー

発起人

内田 忠夫 東京大学教養学部教授
加藤 秀俊 学習院大学法学部教授
加藤 芳郎 漫画家 漫画家協会理事
茅 誠司 東京大学名誉教授 日本学士院会員
小松 左京 作家
東畑 精一 東京大学名誉教授 (財)政策科学研究所顧問
中山伊知郎 (故人)
松本 重治 (財)国際文化会館理事長
向坊 隆 原子力委員会委員長代理 前東京大学総長

加藤秀俊部会 テーマ 日本への村の将来

加藤 秀俊 学習院大学法学部教授
川喜田二郎 筑波大学教授
佐々木高明 国立民族学博物館教授
舛田 忠雄 山形大学助教授
宮田 登 筑波大学助教授
宮本 千晴 近畿日本ツーリスト(株) 日本観光文化研究所所員
米山 俊直 京都大学教養学部教授

加藤芳郎部会 テーマ 日本へのサイバール

加藤 芳郎 漫画家 漫画家協会理事
青空うれし テレビタレント
青空はるお テレビタレント
天地 綾子 歌手 タレント
大山のぶ代 俳優
大和田 獏 俳優
岡江久美子 俳優

加治 章 NHKアナウンサー
川野 一宇 NHKアナウンサー
久米 昭二 NHKディレクター
黒川 和哉 NHKディレクター
小島 功 漫画家
砂川 啓介 俳優
鈴木 義司 漫画家 漫画家集団所属
田崎 潤 俳優
植 ふみ 俳優
坪内ミキ子 俳優
富田 純孝 NHKディレクター
中田 喜子 俳優
墓目 良 俳優
松平 定知 NHKアナウンサー
水沢 アキ 俳優
三橋 達也 俳優
ロミ 山田 歌手 俳優
渡辺 文雄 俳優

茅 誠司部会 テーマ 明日のエネルギー

茅 誠司 東京大学名誉教授 日本学士院会員
有澤 廣巳 東京大学名誉教授 (社)日本原子力産業会議 会長 日本学士院院長 済研究研究所長
生田 豊朗 (財)日本エネルギー経済研究所所長
稲葉 秀三 (財)産業研究所理事長
内田 忠夫 東京大学教養学部教授
大島 恵一 (財)工業開発研究所所長
岡村 和夫 NHK解説委員
尾関 通允 著述家 自由学園講師
金森 久雄 (社)日本経済研究センター 理事長
木元 教子 放送キャスター

五代利天子 評論家
斎藤 志郎 日本経済新聞社アジア 総局長
三枝佐枝子 評論家 商品科学研究 所所長
高原須美子 評論家
富舘 孝夫 (財)日本エネルギー経済研究所研究部長
中村 貢 朝日イブニングニュー ス社代表取締役社長
永井陽之助 東京工業大学教授
橋口 収 公正取引委員会委員長
深海 博明 慶応義塾大学経済学部 教授
伏見 康治 名古屋大学・大阪大学 名誉教授 日本学術会 議会長
松根 宗一 大同特殊鋼相談役 (社)経済団体連合会常 任理事
村田 浩 日本原子力研究所顧問

小松左京部会 テーマ 大正文化研究

小松 左京 作家
河合 秀和 学習院大学法学部教授
中村 隆英 東京大学教養学部教授
大来佐武郎 内外政策研究会会長 (社)日本経済研究センター 理事・顧問
江藤 淳 評論家 東京工業大学 工学部教授
河合 三良 (財)国際開発センター 理事長
北原 秀雄 前駐仏大使 (株)西武 百貨店顧問
木田 宏 国立教育研究所所長

小林陽太郎 富士ゼロックス(株)社長
篠原三代平 成蹊大学経済学部教授
滝田 実 アジア社会問題研究所 理事長
堤 清二 (株)西武百貨店会長 (株)西友ストアー社長
中根 千枝 東京大学東洋文化研究 所所長 国際人類学民 族学会副会長
中村 貢 朝日イブニングニュー ス社代表取締役社長
林 雄二郎 (財)未来工学研究所副 理事長
松山 幸雄 朝日新聞社論説委員
ロベールJ・パロン 上智大学比較文化学科 教授

松本重治部会 テーマ 二十一世紀における 日本人の生き方

松本 重治 (財)国際文化会館理事長
川喜田二郎 筑波大学教授
永井 道雄 朝日新聞社客員論説委員 学名誉教授
中村 元 東方学院院長 東方大 学名誉教授
本間 長世 東京大学教養学部教授
前田 陽一 (財)国際文化会館専務理 事 東京大学名誉教授
榎 文彦 東京大学工学部教授
武者小路公秀 国連大学プログラム担 当副学長
村上 兵衛 (財)日本文化研究所専 務理事
柳瀬 睦男 上智大学学長

佐々木 行 ダーク・ダックス 歌手
高見沢 宏 ダーク・ダックス 歌手
石井 好子 歌手
小林 道夫 チェンバロ奏者
佐賀 和光 建築家
佐々木信也 スポーツ・キャスター
千 宗室 裏千家家元
堤 清二 (株)西武百貨店会長 (株)西友ストアー社長
富田 勲 シンセサイザー作曲・ 演奏家
服部 克久 作・編曲家
松原 秀一 慶応義塾大学文学部教授
三村 忠良 日本国有鉄道職員局労 働課長
ミルトン・L・ラドミルビツチ アメリカ公立アマリカ ンスクールビジネスマ ネージャー

事務局

村上 兵衛 (財)日本文化研究所専 務理事
山城 祥二 芸能山城組組頭 筑波 大学講師
吉川 光 NHK整理部担当部長
笠井 章弘 (財)政策科学研究所理 事長
生田 豊朗 (財)日本エネルギー経 済研究所所長
依田 直 東京電力(株)取締役企 画部長
山田 嗣 (財)政策科学研究所主 任研究員
斉藤 みな (株)二十一世紀企画
浜岸 薫 (株)二十一世紀企画
村野 京一 (株)二十一世紀企画
遠山 一 ダーク・ダックス 歌手
喜早 哲 ダーク・ダックス 歌手

(各部会とも五十音順)



21世紀フォーラム 第十二号

発行 一九八二年三月三十一日
発行人 笠井章弘
発行所

21世紀フォーラム事務局

東京都千代田区永田町二一四―二
フレンドビル6階

(株)二十一世紀企画内
電話〇三五〇八二六二五

編集

21世紀フォーラム事務局

印刷

(株)東京印書館

■ クロイワ・カズ

